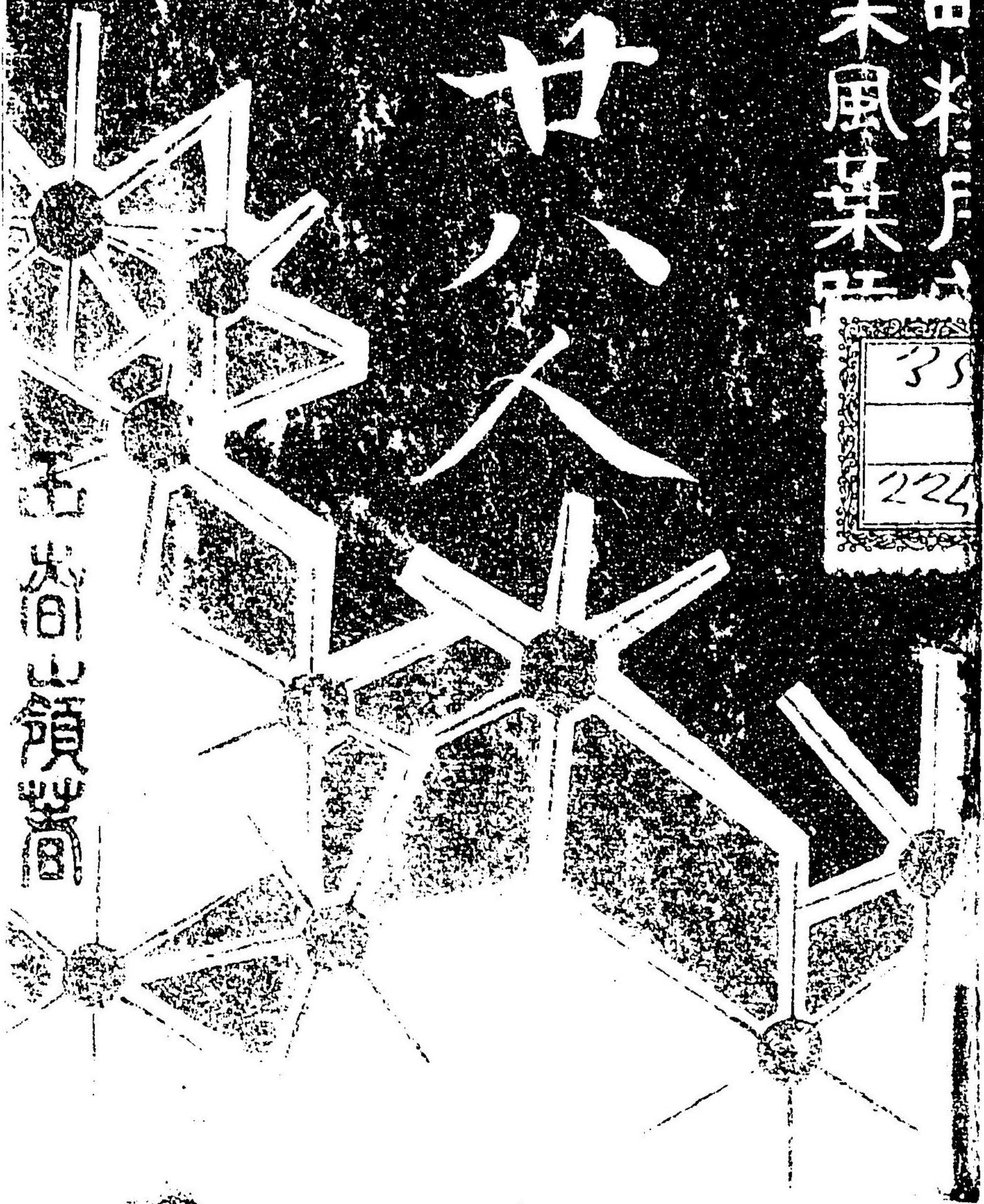


才田 栞 氏  
小栗風葉 氏

35  
224

現代  
文士  
廿八人



五洲堂出版

序

人を見るに、始めて逢ひて、始めて得たる感じが正しきものなりとは、人を相する者の能く言ふ所也。魚市に在る時は、腥を知らずとかや。美人も平生見つけて居れば、さまで美ならず、醜婦も平生見つけて居れば、さまで醜ならざるものなり。この書中の文士は、二三を除きてはみな余が平生見つけて居る如く、美醜の感大に鈍くなり居れり。さればとて、余には一見よく人を知るといふ眼識もなし。殊に凡夫の心の鏡は、いつも自惚の雲に蔽はれて、自分で自分ばかりはわからず。

余は、この書の作者が一見直に人を判する眼識の鋭敏なるに驚歎せざるを得ざる也。

何人も其文を讀みて、其人を想望せざるを得ざるべし。この作者は、斯る人に代りて、文士に逢ひたる也。而してその鋭き直覺は、たしかに文士の人物の一面を傳ふるに足るものありと信ず。文士に逢つて見て、當がはづれたりとは、よく人の言ふ所なるが、これ餘り買ひ被りたるか、もしくは皮相を見たるかにて、眞の活眼ある者より見れば、人物、容貌、文章は必ず一致せる所あるもの也。平生多く文士の作に接せる者、この書を参考にして、その人物をうかゞひ、この書にてうかゞひたる人物をその作に就いて驗すれば、大に興あるべし。この作者の人物も、必ずや、この一書の中に躍如たるものあるべし。知らず、如何たる人ぞや、記して讀者諸君に問ふ。

明治四十二年初夏

大町桂月

目次

田山花袋……………三	✓國木田獨步……………三
生田葵山……………六	夏目漱石……………三
菊地幽芳……………三	小川未明……………四
小杉天外……………五	内藤鳴雪……………七
德田秋聲……………七	水野葉舟……………六
島村抱月……………八	✓後藤宙外……………八
德富蘇峯……………九	✓島崎藤村……………一〇
小栗風葉……………三	大町桂月……………三

吉江孤雁……………	二六	内田魯庵……………	二九
與謝野晶子……………	一四〇	泉鏡花……………	一四七
徳田秋江……………	一五四	小山内董……………	一六四
正宗白鳥……………	一七〇	蒲原有明……………	一七九
戸川秋骨……………	一八三	柳川春葉……………	一八六
片山天弦……………	一九二	三島霜川……………	一九四

附 録

「如何にして文壇の人となりしか」

正宗白鳥……………	二〇五	相馬御風……………	二一〇
-----------	-----	-----------	-----

生田長江……………	二二二	小山内薫……………	二二六
水野葉舟……………	二四八	金子薫園……………	二五七
眞山青果……………	二六七	吉江孤雁……………	二七四
徳田秋江……………	二八四	片上天弦……………	三〇二
小川未明……………	三〇五	三島霜川……………	三〇七
岡本靈華……………	三三三	秋田雨雀……………	三三〇

# 現代文士二十八人

王 春 嶺

人は、初めて人に相接した時——初対面の時に、其相手の心理や性格を直観し洞察する。縦し、直観し、洞察しないまでも、何等か相手の性格の閃きを享けるものだ。その眼、その聲、その風采その態度に依つて、そこに相手の人格の深い印象は刻まれる。茲に書かうとするのは其第一印象である。元より、その最初に享けた印象が、その人の正しい性格——誤まらぬ性格であつて、それに依つて、その人の眞の人格を説明することが出来るか、何うかそれは分らない。茲には唯、その人が初対面の人に對して何んな閃き、何んな感を興へ、何んな印象を刻んだか、その第一印象を偽らず飾らず、最も眞摯に、最も忠實に書いたのだ。

## 田山花袋氏

文壇に田山花袋氏の名を聞くのも既に久しいものだ。ずつと古い硯友社時代から、その美文や、紀行文や、小説には些いゝく接して居る。然し、文壇に名を現はしてから久しい割合ひに、その名の擧らないのも、久しいものであつた。初め「野の花」だの「故郷」時代には弱々しいセンチメンタルな作品を描いて、それから「うき秋」を書かれた當時からその作風が一變して、「重右衛門」の最後「春潮」時代を経て、此の今の自然派の運動が盛んになるまで、短いものではあるが、随分書れたも

のだけ、れ共、實際花袋氏の眞の技倆——名が文壇に認められたのは漸く近頃のこと、藤村氏の「破戒」や獨歩氏の「獨歩集」に依つて覺醒せられた文壇に、自然派の運動が勃興して來た三十九年の春頃からのことである。

兎に角、現代日本の文壇で、自然主義を標榜して居る作家の中では、錚々たるものだ。

自分が田山花袋氏に、その代々木のお宅で初めてお目に懸つたのは、忘れもしない四月の二十二日……空の曇つた雨模様、夕暮れ、六時過ぎて、室の中には最う燈火が點いてゐた。

自分はそれまでに三度ばかり同氏を訪ねたが、三度とも留守であつた。で、之れは文壇の大家とかには能く有り勝ちな、我々のやうな者に會ふのは面倒なので、それで居留守を使はれるのではあるまいか、と然う思つて、無禮だと憤慨もし、その仕打ちを忌々しくも思つたが、會つて見て、今迄の然うした厭やな感情はケロリと忘れて了つた。

その夕、玄關に音訪ふと取次には奥様が出られた。顔の丸味な、色の白い、些つと愛嬌のある顔だ。自分の來意を聞いて、來客中ですが、と些つとためらはれたが、花袋氏に聞きに行かれた。旋て出て來られて、玄關の右側の八疊の客間に通さ

れた。成程其所には先客があつて、酒が始まつて居る。客は極く親しい人と見えて、花袋氏は無雜作な風をして居られる。自分を上の方に坐らせて、

「好くお出で下すつた。此の間は生憎何うも失禮ばかりして……」

挨拶をして直ぐ膝を組んで、度の強い近眼鏡の底から、鋭い眼を光らして、睨むやうに自分を見られる。その眼が餘りに光るので、自分は初め恐ろしいやうな氣がした。

之れ迄作物を讀んで想像して居た花袋氏と、此の實際の花袋氏の人物とは非常に違つた。作物に依つて自分の想像



に描いた花袋氏は、瘦せた蒼い顔の、女々しい人だと思つて居たところが、實際の花袋氏は、それと全く反對で、能く肥へた、胸廓の廣い、頸の短かく太い、目方は少なくとも二十貫目以上と云ふ立派な體格だ。胸や手の指に濃い毛が生へて、齒は少し外に反つた。身形は一向構はぬらしく、その態度も極端に云ふと粗野の方で、跌坐を組んでグビ／＼酒を呑まれる。そして話には餘り調子付かれない方で、不圖すると言葉に熱を持つが、直ぐ黙つて、例の鋭い目で、チロリと見られる。相手の心の底まで睨まねば承知出來ぬと云つた風だ。旋て酒が濟んで飯を食ひ、茶を飲んで巻煙草を幾本でもふか／＼

と吹かされる。自分は、此の體格で、此の様子で、能くあゝした戀や少女に憧れたセンチメンタルな作品が出来るものだとそれを第一不思議に思つた。

聲は少し錆のある太い聲で、餘り人の胸に響く方では無い。人と相對して居ながら、言葉の斷れ間には、何か自分のことを考へて居ると云つたやうな、取りやうに依つては厭やなところがある。座談は極く下手の方だ。客の方から話を仕向けねば、何時までも深い沈黙は續く。その間、花袋氏は鋭いその視線を空に投げて、ふか／＼煙草を吹して居られる。客があるのか無いのか、そんなことには頓着無く、自分一人だ

と云つた風だ。話を仕向けると一通り答へはされる。答へて了ふと元の沈黙になるのだ。で自分は手持無沙汰で、何か話頭を向けやうとする。之れでは、客の方で主人役を務めるやうなものだと思つた。

總ての様子にゆつたりとした逼らない所があつて、些つとは懐き難いが、然し氣の置け無い人だ。自分は色々話を仕向けて、此の人の心の底まで讀まうとした。けれ共、恰度年取つた老探偵のやうに、心に一分の隙も無く、胸の底まで入り難い……いや、入り難いのでは無い入れ無い人だ。上へは成程氣さくなところがあつて、或る所までは接し易い。然し、そ

の或るところより以上深く此の人に接することは出来無い。そこまでは何の隔ても無く人を近寄せるが、それ以上には何うしても入るを許さ無い。自分の胸の底に人を觸れさせるのは何か自分のプライドを傷付け、自分の屈辱でもあるやうにピッタリ蓋をして、了ふ。そのやうに自分の胸には蓋をして置いて、それで相手の胸の底まで探らうとして油断をし無い、悪くする人だ。ずいといと云つてもそれが此の人のキヤラクターだから仕方ない。

藝術家だ。胸の底には熱い血も燃えて居やう。然し、一時パツと燃え上るその情の火も、忽ち養はれた冷たい理智の爲

めに直ぐ消されて了ふ。胸には熱い血汐をたぎらせながら、  
 理智に囚はれた此の人の頭には、その血汐のみなぎり――  
 情の赴くまゝに身を任せることが出来無い。寧ろ、その情を  
 抑へても、コンベンショナルの完全な人にならうと努力す  
 る。花袋氏の心には常に二つの潮流がある。一つはその生れ  
 ながらのデリケートな性。一つは従來のコンベンションに  
 養はれた、全く囚はれた性。此の二つの性が各々調和されず、  
 前者は藝術の上に、後者は日常生活の上に、二面に現はれて  
 居る。それで作品の上では極めて感情的な、觸るれば其胸か  
 ら火が燃えさうな人のやうに思はれるが、實際人物に接し  
 て見ると、常識の發達した理智の明るい、普通圓滿な人であ  
 る。

自分は初めて花袋氏に接して、此の兩面の生活をして居  
 る人であると云ふことを最も深く感じた。幾らこちらから  
 胸を展いて、胸と胸と相觸れさせやうと勉ても、花袋氏の胸  
 には、養はれたる性と云ふ一枚の冷たい板があつて、どうし  
 ても切實にその胸に相觸れることは出来無い。その胸に抱  
 かれることは出来ない。その作物に依つてその人物を想像  
 し、大なる期待を以つて面會した自分は、初對面に於て、容易  
 に人を觸れしめ無いその胸に、何となく慄らなく失望した。

自分は花袋氏を心にはどんな悩み、どんな悶へがあつても、それを能く抑へて、平凡な日常生活に甘んじて居ることの出来る、極めて常識の發達した人で、唯作品の上に於て、その生れながらの飾らない自然の生活をして居られる人だと思つた。

## 國木田獨歩氏

「自分は未だ國木田獨歩氏に、面と向つて——二人相對して語つたことは無い。唯、或る人の所で、その或る人と對談して居られるのを、傍で些つと聞いたばかり、固より正式の對

面と云ふことは出来ないが、それでも、とにかく初對面は初對面である。で、茲には其時自分の國木田獨歩氏に依つて得た感じを記して見る。

一目見て自分は獨歩氏の人物とその作品が一致して居るのに驚いた。獨歩氏の作品は、どれも短かいキビトくした、生氣の溢れた、少しのだけ、氣味も無いものばかり。人物もその作品と同じやうに、小さいが然し能く整つてキチンとした、一分の隙もない締りのある態度で、其時は洋服であつたが、身體にキツシリ合つて、身内にはその溢れるやうな生氣が、破れるまでに緊脹して居る。聲にも身のこなしにも才氣

がほとばしつて、丈こそ低い、が、身體こそ小さい、が、その小さい身内には、才氣が満ち充ちて、小氣味が好い。言語も態度もハッキリしたもので、少しモジ／＼すると、それがまた、だる／＼つて、堪らないと云つた風だ。そして、始終その眼をせか／＼と働かせられる。一分だつて休んで居る時は無い。

氣の短かい癩癢持ちの、少し氣に入らんことがあると、口で云ふよりは先づさきに、手が飛ぶと云つたやうな氣性で、恰度砥ぎたての、刃尖のバリ／＼した光つたナイフのやな氣性だ。觸れると切れさうなので、觸れるのも恐ろしいくらいである。

そして、人を見るのに、その相手を嘲むやうな、冷笑するやうな、冷たい皮肉なところがある。近寄つて行つたところが、頭で跳ね返されさうだ。その性質は極端から極端に走つて、とても中庸などの保てる人ではないらしい。總べての人を味方で無ければ、敵とすると云つた方の人らしい。で、眞に親しくなれば、手と手を握つて泣くことも出来よう。互ひの胸と胸と相觸れて、二人の血管を通じて、血を通はすことも出来よう。が、それでなかつたら、普通一遍の友となることは出来まい。心を割る友でなければ、後は皆他人であらう。

## 生田葵山氏

不圖した機會から或る所で、自分が生田葵山氏に會つたのは、つい近頃のことである。やはり、二人相對して話したのは無い。それは何かの集會の席で、大勢の人と一緒に會つたのだ。背の低い、黒々として硬い髪を長く刈つて分けた、口髯の濃い、思ひ切つて厚い唇は、赤味が冴えず黒ずんで居る。色は白くて肌目はこまかい、どツちかど云ふとぶこつな人だ。が目元がはつきりとして涼しい。優しみもある。鼻は大きかつた。聲が妙だ。響きが軽くて、震動が短かい。音が嘎れたやうに掠れて、力ある言葉でも人の胸には深く響かない。此の聲が葵山氏の人物を軽く見せる。思想に中心の無い輕佻な人物のやうに思はせる。その笑ひ聲は力無く上づつて居て、厭やな感を人に與へる。慣れたら然うでもあるまいが、初對面の時には恐しく耳ざはりのする聲である。人の話を聞く時に腮を突き出して、頭を斜めに、左りに曲げて、とろりとしたやうな目を流し目に相手を見入つて、一句の切れる度毎に「フム」口で頷づいて、何かをかしいことがあると例の上づつた軽い聲で笑ふ。人の話を聞く時に頭を斜めに相手を流し目に見る、その癖が、自分は特に際立つて厭やな氣

がした。

そして何か話をする時の、その話の裏には、何でも自分が褒めて貰ひたいと云ふやうな口振が明らかに見られる。それは、誰れだつて自分を褒めて貰ひ度く無いものはあるまいが、思慮のある大抵の人は、然うした思ひは氣振りにも見せず、覆ふのが常だ。それを葵山氏は、自分を褒めて呉れがしの口振りを明らかに見せる人だ。究り無邪氣——吾が心を覆はない天真爛漫たる人なのであらう。けれども、自分は腹の中に影も空氣も何も無い浅い人のやうに思はれて、葵山氏を大人物——偉い人——も大袈裟だが兎に角心に深

みのある人と思ふことは出来なかつた。却つて、餘り深く思慮しないチヨコくした、表面も裏面も無い至つて氣の好い正直な人のやうは思はれた。とにかく葵山氏は重味あり力あり威嚴あり深味ある人ではあるまい。思つたことは何でも口にしてその爲め人の感情を害するやうなことがあつたら、直ぐ幾度でも頭を下げて謝するのを、何の事とも思はない人らしい。重味はないが、そのかはり軽い天真な所があつて、人から決して敵視されるやうなことはあるまい。人から決して憎まれるやうなことはあるまい。至つて平和な人であらう。

然し、その平和が却つて葵山氏の才を毒するのではあるまいかと、自分は然う思つた。人から少々悪口を言はれて、縦しその爲め腹を立つても、その人に面と向つて、それを責る程葵山氏は狭量では無い。好く云ふ敵を求めないのだが、失禮をも省みず極端に云ふと敵を求め程盛んな意氣と云ふものが無いのだ。己れに迫害する總てに對して極度に反抗すると云ふ氣力が無いのだ。一口に云ふと心の弱い人なのだ。蔭ではごうを煮やしても、その人と面と向ふと敵として立つことが出来ず、自分の方から折れて調和して了ふと云つたやうな弱々しい性質の人らしい。今の人々に特有な、

強い、尖つた、鋭い近代的な所の少しも無い人だ。人物に一毫も苦がいところが無い。暖いところが無い。深く泣き、深く怒り、深く歎き、深く悲み、深く悶へ、深く惱み、深く煩ふことの出來ない——否、然うして何所までも深く進む鋭い氣力の無い、傍で見れば齒がゆい程弱い人である。些つとしたことでも氣にして眠れ無いと云つたやうな神経質で、極く消極的な、少しも積極的な努力の無い、斯うした性質では、恐らく强者として傲然と世に立つことは出来無いであらう。

自分は、葵山氏は氣障で、厭味の多い人であると兼て聞いて居た。然し、會つて見て、別に氣障なところや厭味のところ



はなかつた。氣障だ、厭味だと言はれるのは、要するにその態度のことであらう。心は至つて好い正直な人だけ、れ共、その笑ひ聲、人を流し目に見るその癖が、葵山氏を厭味の多い人とも、氣障な人とも見せるのだ。決して、心から氣障な厭味な人では無い。只、心の弱い、動き安い、女々しい——一言にして盡すと小人物だ。と自分は思つた。之れが、自分の葵山氏に依つて受けた、第一印象の偽らない告白である。

## 夏目漱石氏

漱石氏が「猫」を書いて、一足飛びに文壇一方の大將となり、

お蔭で、金持ちだと云ふ噂のある東京朝日新聞社に抱へられて、大學の先生を止した時の告白文なるものは、同新聞に出たが、それを讀んだ時、大いに痛快なことを云ふお爺さんだと思つた。其漱石氏に余が最初面會の光榮を得たのは、ついで去る頃のことである。家は早稻田の南町で、屋敷は些つと廣い黒い板塀で圍まれて居る。右の門柱に「夏目金之助」と楷書で認めた木の名札が張つてある。門より玄關まで砂利を敷いて、歩くとじやくくと云ふ。格子戸の右の方に「木曜日の外會謝絶」と云ふ紙の切れが張つてあつた。破れて居る。余の漱石氏を訪ふたのは、夕方六時ごろで、初秋の日は既

に暗らかった。案内を乞ふと取次に出たのは、年は十五六、顔の丸い色の白い小がらな、小間遣型の娘であつた。邊りは仄かな夕暗みであつたので、其色の白い襟首から、水々しく美しかつた。些つとお目にかゝりたいと名刺を出す、それを「つやく」と白いしなやかな手に受取つて、茶の間の方に其姿は消えて了つた。消えて行く後から見えた赤い帯と白い其顔が目に残つてぼんやり立つて居ると、出て來られたのは漱石氏自身で、今飯を食はねばならぬから、其所らでも散歩して二三十分後に來て呉れと言はれる。余は仕方がないから、二三十分後を約して、其所を出た。恰度夕飯前ではあり、

其所らのお手輕へ入つて腹をこしらへ、再び出掛けた。早速通されたのは、其の書齋である。書齋と云つても、一方に十五疊ぐらゐの西洋間と、其の隣りに十疊の日本室がある。

余は日本室へ通されたのだ。兩方の書齋に大きな本箱が並んで、中にはクロース金文字入りの本が一ぱい詰つて、ピカ／＼して眩しいぐらゐだ。道具なども好いもので、殊に其机は何と云ふ木か知らないが、黒いつやく／＼して重さうな木である。有繫は文壇の大家たる夏目漱石先生の書齋だけあると、實際つく／＼感服してしまつた。余の之れまで訪問した文壇の大家で、漱石氏ぐらゐ立派な家に立派な道具を

使つて居る人はない。兎に角偉いものである。座蒲團なども絹で、綿がぼこくと入つて居る。座ると尻が迂りさうである。

漱石氏と相對して座つた。

中肉中背で年は四十五六ぐらゐであらう。顔は丸からず長からず、二重瞼で、目が一番好い。濃い口髯がある。そして白い痘痕が疎らに散つた。鑄物のやうに正しく、きちんと膝を圓く座布團の上に座つて對談して居る長い間、殆ど身動きもせられない。聲には艶も調子もなく、恰度蜘蛛の尻から糸が繰り出されるやうな調子で、云ふことに行き詰つたり、つ

かへたりするやうなことはなく、ずる／＼と誠に都合よく迂り出る。至て話が聞き易い。口は早くもなく遅くもない。之れらが恰度好い加減と云ふものであらう。話をせられる時には、大抵左の腕を右の腋に持つて來て、右の手で其濃い口髯をひねりながら、目は絶えず相手を見て、始終にこ／＼しながら唇を動かすとも見えず、言葉は例の糸のやうに繰り出される。恐しく話の上手な人である。接して見て實に感じが良い。と云つて何もお世辭が好かつたり、愛嬌があると云ふのではない。寧ろ、不愛想である。若し漱石氏のやうな人が愛嬌なぞ振り蒔かうものなら、それこそ、不自然の極、厭味が

あつて虫づが走る。お世辭も言はず、愛嬌もなくして、それで接した感じが好いのだから妙だ。

漱石氏に接した感じは、例へば古めかしい骨董を手にし時のやうなものである。金泊のピカ／＼した所も消えて、一體に何所となく、燻んで人間が時代離れして居る。齷齪として些の餘裕のない現代人も、漱石氏に接すると、何となく煩はしい現代を忘れて、斯う古く奈良朝時代にでも遊んで居るやうな感じがして、氣がのんびりと誠に氣持ちが好い。之れでは、成程、低徊趣味などを唱へるらしい人であると思つた。

文章の上では随分皮肉を言はれるやうであるが、其皮肉は現代人の皮肉のやうに、毒々しい所がない。何時でも一時の滑稽的の趣きを含んだ皮肉である。大體、人物が皮肉ではない。對話中でも決して人を冷笑したり、人を嘲けるやうな皮肉は言はれない。但し、理屈は随分色々といひねくられる方である。一つ問題でも、様々な方面から理屈を引つ張り出して長々と言はれる。然うした傾向は、單に座談のみではない、其作にもあるが、作物の中に於ての理屈をだら／＼述べることの可否は別として、對談中は其理屈に興味を持つて實に面白く聞かれる。つまり、座談のうまい故であらうと思ふ。

漱石氏は長く座つて居てもしびれが切れぬと見える。何時までたつても、少しもびくりとも動かず、きちんと座つて、表情も何も變らず、能く話される。

余は、漱石氏に接して見るまでは、實に氣取つた、剛岸な、己れを高しとした、見るから小癢に觸る人であらうと思つて居たが、實際接して見ると、決して然んな所は少しもない。それは、遠慮もなく思つたことは、すん／＼言はれるが、其所が漱石氏の面白いところである。誰しも思つたことをつけつけ言はれて見れば、好い氣持ちはしない。云ふ人に依つては小癢に觸ることもあらうし、腹の立つこともある。然し、漱石

氏は何程思つて居る所をつけ／＼口及び其行爲に現はしても、決して癢にも觸らなければ、腹も立たない。要するに人間が、くすんで骨董的であるから、従つて人物にも厭味がないのであらう、何うしても、吾れ／＼と同じ血が通つて、同じ社會に活動して居る今の人間とは思はれない、俳句の會にでも行つたり、お茶でも立てたり、圍碁でも打つて楽しんで居るに似合つたお爺さんである。

但し、それは年の上から云ふのではない。感じの上から云ふことである。

余は腹のむしやくしやくしたり、氣の苛つく時には、斯う云

ふ人の所へ來れば好いと思つた。

三二

## 菊池幽芳氏

菊池幽芳氏は所謂家庭小説家である。己が罪に依つて一度び其聲名を馳せた幽芳氏は、續いて「夏子」を出だし「乳姉妹」を出して家庭小説家としての饒名を馳せた。文學に趣味を持ち、小説を愛讀する人々で、恐らく菊池幽芳氏の名を知らぬ者はあるまい。遠く身を關西の地に置いて、而も能く家庭小説家として中央の文壇に於て、その聲名を競うたのは、獨り幽芳氏あるのみだ。然し家庭小説の時代は過ぎ去つた。日

本現時の文壇は自然主義の文壇である。自然主義の作家乃至自然主義的傾向を帶んだ作物でなければ、中央文壇にその生命を保つことの出来ない程、今の文壇は自然主義に眞つ、黒になつて居る。自然主義派の作物以外の作品を容れる程今の文壇は寛容ではない。

繰り返して云ふ、菊池幽芳氏は家庭小説家である。日本の文壇は、家庭小説時代から、自然主義に進んだが、幽芳氏は依然として家庭小説を書いて居る。自然主義の時代に家庭小説を書いて、大阪毎日新聞に掲載された「寒潮」に於て、自然主義の作品を攻撃した、幽芳氏は、時代と共に推移し、此の劇し

三三

い時代の思潮を追ふて無限に進むと云ふ程、而く頭のシャ  
 アブな人でない。家庭小説に依つて、聲名を馳せた幽芳氏は、  
 家庭小説の時代は既に過ぎ去つて自然主義の時代となつ  
 たにも關せず、依然としてその家庭小説に依つて、新らしい  
 自然主義を罵つて居る。幽芳氏は正直な人である。然し、此の  
 意味に於て、時代に没交渉な人とも、後れたる人とも、既に葬  
 られたる人とも、言へるのだ。然しながら、幽芳氏の生命が全  
 然滅びたとは言へぬ。成程、今の文壇では、大阪の地で家庭小  
 説を書いて居る一幽芳氏を、彼れ是云ふ程の餘裕と度量を  
 持たぬ。故に中央文壇に於て幽芳氏の生命は滅びたとも言

へるが讀者の方面に於て、未だ幽芳氏の生命を滅さぬ。總て  
 の小説の讀者が自然主義になる程、日本の小説の讀者は進  
 歩して居らぬ。蘆花氏の「不如歸」が未だ版を重ね、田口掬汀氏  
 の「伯爵夫人」や「女夫波」が田舎の本屋の店頭に並んでぼつほ  
 つく、賣れて居る如く、幽芳氏の「乳姉妹」や「夏子」も賣れて居  
 る。

その菊地幽芳氏に、自分が初めて面會したのは、昨年暮  
 れ、それも押し詰つた十二月三十一日のことである。東京か  
 らわざわざ行つたのだ。菊地幽芳氏のお宅は、大坂ステエシ  
 ンから程近い中の島と云ふ處にある。汽車から降りて直

ぐ中の島の其お宅に車を飛ばした。西向きの格子戸造りである。借屋か何か知らぬが、木口もかなり好くて、見たところキツシリとした建て方だ。細い格子戸を開けると鈴が鳴る。入ると直ぐ切り石が敷いて、薄暗い中庭になつた。右の方は、直ぐ上り口になつて、中硝子の障子が閉めてある。その狭い薄暗い庭には、芭蕉と外に何か青いものが植ゑてあつた。格子戸を開ける鈴の音に、女中がその上り口の障子を開けて取次に出た。來意を告げると、玄關から左り、四疊半の室に通された。室には床もある。明りはその中庭に面して切られた窓から入る。室内の壁は黒赭色の砂で塗られた。明りが不足

なので薄暗い。陰氣な室である。先の女中が火鉢を持つて來る。茶を持つて來る。自分は煙草をのまぬので、その茶を啜つて、室の中を見廻した。別に何の飾りもない。次の茶の間らしい室で、若々しい女の話し聲——時々華やかに甲高いその女の笑聲が聞える。聲から云つても笑ひ方から云つても、確かに教育ある女である。自分は、幽芳氏の奥様ではないかと思ふ。と同時に、幽芳氏は今の小説家仲間で、評判の夫婦仲の好い人で、毎年二回とか毎日新聞社から來る手當て奥様の好い着物を買つて、自作の小説が劇に上る時に、奥様はその美しい着物を着て、二人一緒にそれを見物に行くと云



ふ些ツとした記事を何かの雑誌で見たことを思ひ出す。

そんなことを思つて、幽芳氏の人物を色々と想像しながら、少時待つて居ると、その茶の間から通じた二階の階段を降りる音は軽いが、然し、如何にも落付いた男らしい足音がして、旋て襖を開けて自分の待つて居る室に來られたのは間違のない之れが幽芳氏であると思つた。で、自分は直ぐ座布團をすべつて、挨拶の用意をした。幽芳氏は悪く澄した程落着いたもので、しづく〜と坐り、

「私が菊地で……」と挨拶される中々落着いたものだ。座布團の上にキチンと坐つて態度なんかもシヤンとして、自分

の用向きを、「ハ、ハ」と云つて聞かれる。そして、皆聞いて言葉が切れると、明晰な言葉で話される。しつかりしたものだ。

物は何と云ふか知らないが、多分之が大島総とか云ふものだらうと思つた。羽織も着物も地は同じかつた。縮緬の兵子帯を締めて、身體をどうか動かされる度に、キュー〜と幽かな音を立てる。地は色澤のある柔らかな物である。身體は瘦せぎすで、背は餘り高くない。小がらの方である。色は青黒く、眼のハツキリした鼻は小さく筋が通つて、髯の毛數は少しく赤いが、然し長い。その長い髯を水平に、兩方にピンと細く分けられた。髪は短い刈り方で、頭の上を心持ち長くせら

れた。然し、分ける程長くはない。

四〇

自分も話し、又お話を伺ひながら、之れがああ、「己か罪」や「乳姉妹」や「夏子」や「筆子」を書いて、あれ程有名であつた——今でも有名な菊地幽芳氏か、と然う思つて、チロ／＼見た。成程、眞面目な人らしい。鳥渡見たところは、學者か、氣のきいた中學校の教師と云つたやうな人物だ。對談した間が二十分もあつたらうが、其間些つとも笑はれない、口の邊りで微笑まれたことすら、ない。尤も、何も笑ふやうな話をしたのではないが、然し大抵の人が初め挨拶をする時ぐらゐには、些つと笑顔を見せるものだ。然し、幽芳氏は眞面目で——さながら裁

判官や警官のやうに、始終冷たい顔をして和つこりともされない。幽芳氏は笑はない人である。眞面目な人である。家庭に於て奥様ぐらゐには時々その温かい笑顔を見せられるであらう。けれども、友と相會しても、尙更初對面の人などにその笑顔を見せられることは滅多にないであらう。

幽芳氏は嚴格な人である。謹嚴な紳士である。冷たい人である。四角な人である。固い人である。些つと接して見ては温いところがない、ふつくらとして柔かく、圓く盛れたやうなところがない。總ての生活が規則的で、所謂文士には有り勝ちな毫もづぼらな所がない。正しい人である。義理堅い人で

ある。常識の發達した人で、その常識に支配されて居る人である。由來文士と云ふ者の情は、熱し易い、激し易い。その血が熱し、情の激した場合には、義理だの、約束だのと云つたものは、その眼中に無い——常識を失つて了つて、奔放なる其情の儘に、身を托すだから失敗が多い。情の緊張し、激動した場合には、それを制する冷やかなるところがないのだ。文士仲間では又然うしたものに拘泥しない無頓着な、奔放な性格が喜ばれる。金儲けや、好い着物を着たり、生活の方面のみに齷齪するのは、天才者の愧づべきことであると思はれて居る。常識は天才者に缺けて居る。妻は寒を愬へ、兒は餓へに泣

くとも、興が來なければ、米櫃の底は空になつても、決して筆を執らない。筆を執つて稿成り、縦しそれが金になつても、その時若し興が湧けば、その金はふいに飛んで了ふ。常識から見て、文士ぐらゐづば、ばらな生活をするものはない。文士は感受性が強い、故に些つとしたことにも怒る。激する、悲しむ泣く、哀れむ、喜ぶ、狂する。或一方に秀でたところがあると同時に、その人物に非常に多くの缺陷がある。文士は、常識を以て律し難い。人並でないのだ。文士の性格には凸凹がある。

菊地幽芳氏は文士である。然しながら、その性格には普通の文士に有り勝ちな、然うした缺陷がない。四角に固く其人

格の發達した人である。

四四

若し奔放な性格が文士に缺くべからざる資格としたなら、幽芳氏は全く文士たるの資格がないと云て好い。倫理學者か、中學校の教師か、全く適して居る。その毫も餘裕——と云ふと語弊があるが——隙すきの無い謹嚴なる動作少しも紊れざる風采、正しい態度、幽芳氏には**づばら**な面影が少しも無い。物堅い人である。情に厚い人とは言へまいが、義理に堅い人である。血の熱い人とは言へまいが、絶えず平均に冷めたい人である。當てになる人である。信用の出来る人である。

人に何か頼まれた時に、決して一時情に熱したり、劇したりした上で、安受合ひをすると云つたやうなことはあるまい。必らず隅から隅まで事情を明く確かめ、其上理智の判断を一度透した上で、其判断に依つて事を處決されるであらう。若し、其判断にして其人の願を容れるを許さない時は、如何に情に慙へ、涙に縋つても、決して再び最初の拒否を翻されるやうなことはあるまい。其人は情の冷たい、涙の無い人と怨むであらうが、それは怨む方が悪いのだ。幽芳氏の判断は、正しい判断である。其代り又、一度其願を容れたなら、如何なる事があつても、必ず其責任を果されるであらう。

四五

幽芳氏は血も情も冷たいと言に云ふことは出来ぬ。友の難儀を見たら、必らず自分出来るだけの力を以て、その友の爲めに盡されるであらう。人の爲めに泣かれることもあるであらう。然し、その友の爲めの盡力や、人の爲めの涙や、それが普通の人なら、ハツと思つたと同時に盡す盡力、衝動的に滾れる涙なのだ。幽芳氏のは一度び理智の批判を透してから働らく盡力である。涙である。

幽芳氏の情が冷たい、涙が無いと見えるのは、要するに幽芳氏の性格に理智が勝つて居るからだ。總ての行動態度が冷やかに見えるのは、脳の中に入つて来る總べての事がら

に對して發する情の働きを普通の人々のやうに直ぐ其儘放射しないで、脳の中で一度び屈折さして理智の批判を透してから働らかせるので、それで冷やかに見えるのだ。

成程、菊地幽芳氏は、小説を以て或る教訓を説かうとして居る家庭小説家である。其作られた小説に依つて、教訓を得る人があるかないか、それは自分の知る所ではないが、然うした教訓を含んだ家庭小説をこつくと眞面目に書いて世の爲め人の爲めを計り、其小説に含れた理想的の、家庭を作つて、其中に平和な一生を送るには、恰度似合つた人であると、偽りのないところ、自分は然う思つた。

二十分ばかりで用事は済んだ。用事が済めば、話の無い人である。幽芳氏には決して餘談と云ふものがない。總べての應接が恰度裁判所流だ。自分は裁判所の門を潜つたことはないが、裁判官に接した時には這麼な感のものだらうと思ふ。

「どうもお邪魔致しました」

「いや、別に……」

斯う云つた調子で別れた。それでも玄關まで見送つて、下駄を穿く間立つて居られた。

待たしてあつた車に乗つて、最う一度お宅を振り返つて

見て

「冷たい感じの人だ。」と自分は心から然う思つた。

## 小川未明氏

木綿縞の着物に、紺緞の羽織を着られた、極めて質素な風采で、顔の色も黒い。下脛骨が張つて、度の強い近眼鏡の中から、眼は鋭く光つた。總ての文士にくらべて、一體に骨々した體格で、指や手首も一度は勞働したこともあると言へるぐらゐ太い。

自分は未明氏に會つて、此の人があの空想に満ちた白雲

の行衛を見送つて泣いたり、秋の凋落を悲しんで涙を落したりする、センチメンタルな作品を書かれると云ふことに驚いた。自分の初めて會つたのは此春のことで、未明氏も然うした従來の作品に嫌らなくて、何か新らしい或る物を求めやうと努力して、煩悶して居られる未明氏の過渡期であつた。で、自ら話されることも總べて文藝上の話——重に自分の求めて未だ求め得られない煩悶や、その他現代の文士の能度に對する不平不満で、話は持ち切つて居た。聲は掠れ氣味の錆のある方で、話をする時に少しあせる氣味がある。眼が絶えず隙もなく働いて、話し振りから、態度から、如何に

もせか／＼して、心の中にゆとりと云ふものがない、太い所がない、どつしりとした重い所がない。じつと坐つた時でも身體の何所か、必ず働いて居る。自分は未明氏に今少し餘裕があつて欲しいと思つた。

未明氏は眞面目な人である。思ひ込んだ事は只一途にその事のみを思つて、他の事を考へる餘裕がない。未明氏は悶へる人である。悩む人である。考へる人ではない。で、とにかく従來の自分の作品に嫌らないで煩悶するが、嫌らないで單に煩悶するのみで、如何なる物を求めて満足したなら好いかと云ふことを考へる餘裕がない。その煩悶は眞面目であ

らう。その苦痛は切實であらうが、恐らくは只眞面目な煩悶切實な苦痛として終る煩悶苦痛で、その煩悶苦痛の中より何物も生み得ない人ではあるまいか。若し煩悶の爲めの煩悶苦痛の爲めの苦痛としたなら、吾れと自ら進んで受けるその煩悶苦痛に、何の意義、何の價值がある。人は何物をか求めん爲めに、悶へもする。何物をか握らんが爲めに苦みもする。何等かの響きを聞かんが爲めに悩みもする。未明氏は悶へ悩み苦みながらも、その悶へ悩み苦みの中より生れ出るべき或物を考へて居ないで、極端に云つたなら、徒らなる煩悶、徒らなる苦痛、徒らなる悩みと云ふことが出来よう。

## 小杉天外氏

余の小杉天外氏に面會したのは、小田原から芝の白金臺町に移られて間もない、夏の或る一日のことである。

午後二時前の夏の日射しはチラ／＼と白く眩しく頭の上に照つて、電車から降りて坂道を歩いた身には、汗がシツトリ體に流れて、風のない日に浴衣はベツトリ肌が付いて、何とも言へぬ氣味悪るさである。

潜りを潜ると、少し廣い庭になつて、門から玄關まで砂利が敷いてある。玄關の傍の松の木蔭に、白と茶の斑の犬が丸



く寝そべつて居る。余の足音をきいて丸くなつたまゝ目を開けて些つと見たが、直ぐ其まゝ眠つて了つた。余は、何と云ふことなしに、此の犬を見ると同時に、偶とコブシの中に描かれた犬のことを思つた。

玄關に立つて見ると、家の中は眠つたやうに寂と静まつて居る。家の廻りの木蔭で鳴く油蟬の聲が、炒り付くやうに蒸し暑く聞える。

玄關から見通しになつた西洋室に、籐で編んだソフワールを置いて、其上に午睡の夢を貪つて居る浴衣を着た人があつた。案内を乞ふと左りの方から取次ぎに出たのは、小間遣

らしい若い女である。名刺を出して來意を告げると、女は其すや／＼と午睡の夢の安らかな人の所へ行つて、取次いだが、直ぐ再び出て來て「此方へ」と言はれるまゝに上つたのは、廣い西洋室の應接室である。

ソフワールの上の人は既に居なかつた。其上には讀みかけの本が伏せてあつた。

室は二十疊ぐらゐの西洋室である。真中に大きなテーブルを据ゑて、椅子が向ひ合せて六脚並べられた。室の中には別に目立つた裝飾もない。濃い色を使つて描いた水彩畫の薔薇の花の額が一面掛つて、室の隅に大きな硝子張りの箱

の中に、美しい花籠が置かれてあつた。室の中に目立つたものは、其二つテーブルには白い掩ひが掛つて、上に團扇臺が一つと、錆びた呼び鈴が一つ置かれた。

少時待つて居る間に、入つて來られたのは天外氏である。今迄、ソフワーの上に掛つて居られた人は天外氏であつた。寢覺めの顔を洗つて來られたのだ。

天外氏は、余と斜めに、向ひ合つて椅子に腰を下された。背の餘り高くない、髪はひつたりと頭にくつつ付いて、二重險の目の丸い、鼻の高い人である。見た所、顔の特色は無論其大きい目で、蟀谷こむかみから削けた頬へかけて、恐ろしく神経の過敏らしい人である。

聲は鋭い所があつて能く透るが、發音には矢張り東北の訛りが取れない。

座談は決して上手と云ふ方ではないが、話される語氣に一種の熱がある。心にもない可い加減なことを間に合せに話して、お茶を濁して濟すなど、云つたやうな、不眞面目な輕佻な所がない。句々其口にされる所は、皆肺腑を絞つて出る所の信念である。従つて語氣に熱もあり、力もあり、聞く人に感動も興へる。惻々として、人を動かすの力がある。

天外氏は愛嬌のある人でもない、又、己れを低くした人で

もない。體も小さく、見た所脾胃に見えるが、何所となく、剛頑人に屈しない。精悍の氣が溢れて居る。お世辭もない。自ら高く止つて居るやうな人であるが、其人物に厭味がない。余は斯うした剛直な男らしい天外氏の態度が好きである。

天外氏は己れの信ずる所を決して一步も曲げる人ではない。恐ろしく自信の強い人である。天外氏は自信の人である。強い自信は犯すことの出来ない權威である。絶對の權威である。此の自信あり。權威ある人の氣焰や罵倒は實に痛快なものである。余は天外氏の話聞いて居る中に、幾たび痛快なる思ひに胸を躍らしたであらう。

罵倒も氣焰も權威なき人々の口から之れを聞けば、一種苦々しい思ひか、さもなければ滑稽の感じがする。要するに聞き苦しいものである。然し、自信あり、權威ある人の口から發せられる所の罵倒や氣焰は、痛快なる一種の批評を聞くが如き思ひがする。

天外氏自身は、只、自分の感ずる所、信ずる所を、忌憚なく話されるのであらうが、それが、吾等の耳には、如何にも痛快な批評と響く、何となく小氣味好く聞える。何人も恐れず、何人にも遠慮せず、忌憚なく吾が所懐を吐かれる。天外氏の態度は、如何にも男らしくて、小氣味が好い。余は好きである。

天外氏は眞面目なる人である。總ゆることに對して、吾が全力を擧げなければ承知出來ない人である。間に合せの出來ない人である。眞乎に怒り眞乎に喜び、眞乎に悲しみ、眞乎に泣き得られる、極めて純な眞面目なる人である。

天外氏は、其創作にかゝる度びに、必らず一世一代の作、吾が骨を削り、肉を殺ぐの苦を積むの作であると云ふことを告白する。或人は一世一代の作が幾度出るのかと、皮肉な冷笑を與へたことがある。然し、何れの作に對しても、それ丈けの熱心と意氣を以て努力を積まれる。藝術に對する天外氏の其深い信念は、誠に畏敬すべきものではないか、尊むべき

ものではないか。恐らく現時文壇の人々の中で、天外氏ぐらゐる藝術の權威を尊敬し、藝術に對する深い憧憬と執着を以て、眞面目な努力と勞作を積んで居る人は少なからう。

一面文藝を冷笑しながら、而も其文藝に依つて生きて行く人々を見る度びに、余は彼れ等の面上に唾して遣りたい程憎惡の念を覺える。少なくとも文藝は、合力的のものである。然るに、文藝其物に對して何の尊敬も、憧憬も持ち得られない人間が、何うして眞乎不朽の生命ある文藝を生み得やう。文藝に携はる人間でありながら、文藝其物の價值と權威を無視し、文士を冷笑する人間は、文藝の敵である。宜しく彼等

は文藝の外に驅逐すべしである。

文藝の權威を無視し、文藝の價値を冷笑するを見むとする人々の多き今の文壇に、余は小杉天外氏の如く、文藝を尊重して、其畢生の努力を文藝の爲めに濺がれる人があるかと思へば、涙滾れる程嬉しい。斯かる人の手に、誠の生命ある文藝は生れるのた。其出來上つた作物の價値や、好惡は何うでも可い。只文藝に對する其眞面目の態度が嬉しいのである。

天外氏は總べてに對して眞面目なる人である。眞乎に喜び、眞乎に怒り、眞乎に泣くことの出來るぐらゐ、尊い、そして

美しいことではない。現代人は其眞摯の念を缺く。眞面目を缺く。眞實衷心より動くことの出來ないのが、現代人の弱點である。現代人は吾其物を内觀し直ちに批評して、冷笑して了ふ。怒笑、悲泣くのも、それは衷心から怒るのでもなく、笑ふのでもなく、悲しむのでもなく、泣くのでもない。怒悲、笑ふ吾其物を觀察し、批評して居る。従つて、吾を忘れて眞乎に怒り、眞乎に泣くことが出來ない。總べてに對して吾のベストを盡すことが出來ないのが、現代人の短所である。嘆くべき所である。時代の罪だ。

天外氏には然うした短所がない。吾が信ずる所に向つて

は、吾の全力を盡すことの出来る人である。其所が天外氏の尊い所である。眞面目な所である。天外氏は現代人の如深く刻に自己を批評しない。従つて人物に皮肉な所がない。醒めた頭に依つて、總てのものを誤解し盡した人間は、皮肉に出るか、冷笑に出るより外に仕方ない。現代人の皮肉冷笑は、誠に餘儀ない苦悶の結果である。自己を批評し得られない人を以て、自意識がないのだと云ふかも知れぬ。然し、自意識と云ふことが何れ丈け偉いことなのだ。總ての人々の自意識が進めば進む程、吾等の平和と幸福と慰安の樂土は次第に亡びて行くのだ。破壊されて行くのだ。自意識が明らかにな

ればなる程、信も、愛も、友も、戀も亡びて、個人と個人との関係は一種の闘ひになつて、世は修羅の巷となつて了ふ。そして世は猜疑と、嫉妬と、呪咀と、皮肉と、冷笑の權化となつて了ふ。世は惡魔の世界と變る。

自意識などは何うでも好い。余は天外氏の如く、總ての事に眞面目に、自己の全力を擧げて、盡し得られる人に對して、無上の尊敬と欣慕の念を持つ。

余は、天外氏の文壇に對して、己れを重んじた態度に、限りなき敬意を持つ。今の文壇、漱石氏と天外氏を除いて、己れを自重せる作家が幾人あるか、自ら、己れを輕んじた作家が多

い。余は天外の剛直にして人に下らず其強い自信を以て、吾が信ずる所、思ふ所に進んで行かれる其態度を思ふごとに、何となく一種の壯美に打たれる。

天外氏の處世上に己れを持する態度も余は好きである。人は以つて貴族的なりと云ふ、其貴族的なるの語は、多少冷笑の意味を含んだものであるが、余は、貴族的に處して行き得られるのは、偉いと信ずる。余の從來面會した文士の中で、眞に耻しくない中流の生活をして居る文士は、夏目漱石氏と、小杉天外氏より外にない。

余は、天外氏の己れを卑しくしない總ての態度が好きである。

其眞面目な、眞摯な態度、余は天外氏に多少の敬意を拂はずに居られぬ。

## 内藤鳴雪氏

内藤鳴雪氏は俳壇の重鎮である。恐らく俳句の一つも讀む人で、鳴雪氏の名を知らぬやうな者はあるまい。

余の鳴雪氏に面會したのは、春未だ早く薄寒い時であつた。多分三月ごろの空の低く曇つた底寒い日であつたと記憶する。

住居は本郷の何やら町である。玄關に案内を乞ふと、取次に出たのは女中で、來意を告げて、女中が取次ぎに入らうとした恰度其時、手に巻紙と硯箱とを持つて、二階から下りて來られたのは、鳴雪氏である。早速通されたのは、二階の客間で、襖一重隔てた、次ぎの室は書齋である。余と鳴雪氏とは、一間も放れて坐つた。

鳴雪氏は見た所最う六十幾歳の老人である。髪は白髪交り、顔にも皺が寄つた。口髯はないが、白髪交りの腮髯がシヨボくくと生えて居る。背の高い人で、手が長い。瘦せてヒヨロ／＼として居る。

老人ではあるし、腰も曲つたが、恐ろしく元氣の好い人で、其聲の高いのと、笑ひ聲の妙なものに、少なからず驚かされた。キチンと坐つて、兩手を膝の上に置いてさすりながら、立て続け幕なしに喋られる。話を人に聞かして居るのだが、自分一人で喋つて居るのだが、殆んど分らない。大抵の人が對談する時には、先づ句切り／＼には、相手の顔を覗つて、其返事か、或は頷くのを待つて、次ぎを話し出すものである。然し鳴雪氏は、決して人の顔を見られない。對手には横顔を見せて、自分は壁を見たり、外を見たりなどして、相手の返事も待たず、句切りもなく、其高い聲に力を入れて喋り続けられる。



滔々懸河の辯とは、如斯を云ふのであらう。

至つて呑み込みの早い人で、此方で未だ半分しか話さない中に、其要領を早呑込みして了つて、自分の意見を話し出される。極めて性急な人らしい。斯う云ふ人に限つて、能く、奇談や逸話を製造するものである。

一見して、何だか枯れ木のやうな妙な人であるが、併し、接した感じが實に好い。仙人に會つて居るやうな氣がする。風采が第一、背がぶぬけて高く、其割り合ひに頭が小さくて、顔が顰しづんだやうで妙である所へ持つて來て、其聲と笑ひ聲が如何にも奇抜なので、何となく人間離れのした人のやうな

感じがする。

仙人——古い繪に見る仙人に正面に會つた時には、屹度生きた鳴雪氏に會つた時のやうな感じがするに違ひない。客に對して別に愛想を言はれるでもなければ、もてなし振りをされるでもないが、それでも何となく懐しいやうな氣がする。人物に氣取つた所や、澄した所がない。客に面會するものも至つて無雜作なもので、初對面でも、之れまで既に幾度も會つたことのある人間のやうに、何の隔ても設けられない。

玄關に訪ねると直ぐ通して、些つと頭を下げ、直ぐ來意

を聞いて、直ぐ話し出される。その性急なこと、目の廻る程の忙しさである。然し、キビく、と片が付いて、氣持ちが好い。話が済むと、余も直ぐお暇した。

至つて氣輕な、風變りの面白い人である。

## 徳田秋聲氏

空の晴れた春の一日、徳田秋聲氏をその本郷森川町のお宅に訪うた。幸ひ在宅で、六疊の一室——秋聲氏の書齋で、お目にかゝつた。無論初めてお目にかゝつたのである。南向きの一室で、日あたりが好い。秋聲氏は左の肘を机に突いて、右

の手を大い瀬戸物の火鉢に軽く置いて居られた。秩父総の着物にこまかい縞の茶色ツぼい羽織を着て居られた。髪は長く刈られたが分けては居ない。濃い髪で、ごはくと少しちゞれ氣味である。髯はあまり濃くなく短かい。顔色は蒼く底濁りがして血色が冴えない。顔の輪廓は細筋で、眼は一重臉の優し味のある眼だ。その眼から細く締つた口元から鼻から、男らしいいがいとしたところがない。聲が妙である。葵山氏の聲とは違ふ。咽佛のところから幽かに顫へて出る。舌は少しも働かないやうな聲である。誰れでも初めて秋聲氏に接した時には、秋聲氏獨得の此の聲に、一番氣がつくで

あらう。口は重い方である。何か話される時には、屹度その眼でちつと相手を見詰められる。そして話をする間は、瞳が据つて、動かない。が、その瞳には人を壓するやうな重い力が無い。鋭い光りがない。いらくとした反抗的の影がない。思ふに心の優しい人であらう。さればと云つて同情の深い人とも思へぬ。優しいのと同情の深いのとは意味が違ふ。縦し同情の深い人としても、同情は同情として胸に包んで、吾れと進んでその同情を實行せられる人ではない。單に同情のみではなく、日常生活に於ても、文藝の上に於ても、秋聲氏は積極的の人ではない。極めて消極的の人であると思つた。吾れ

と自ら求めて煩悶もし、懊惱もすると云つたやうな、デカダンの面的面影は、秋聲氏の性格に於て見出すことが出来ない。煩悶し、懊惱するにしても、衷心より湧き來つた煩悶懊惱ではなく、外部から來る餘儀ない情實の下に、煩悶懊惱する人であらう。煩悶し、懊惱すると云ふより、それを深く考へて解決すると云つた方が適當である。悶へ悩むべき事がらも、悶へず悩まず、只何所までも深く考へて所決する——極端に云ふと、秋聲氏には考へると云ふことがあつて、深く悶へ、深く悩み、深く悲み、深く泣くと云つたやうなことの無い、極めて理智の力の勝つた性質の人らしい。で、秋聲氏の人物には、

いんみりとした、どんな大きい問題でも長い間みつきりとか考へ得られる、ねばり強い——心の底にしい重いところはあるが、今の小説家に有り勝ちな、動揺し、混亂した、いら立つた苦悶の影がない。恐らく深く考へると云ふことが秋聲氏の生命であらう。

その作物を見ても分るが、秋聲氏にはバツとした華やかなところが無い。秋聲氏の人物の色は、しぶい、くすんだ色である。人の眼を眩めかすやうな、げくしい色彩がない。極くぢみな人である。それで、自分を超然としたり、皮肉に人を見たりするやうな厭やなところが無い。初めて會つても直

ぐ打ちとけ得られる。座談が上手と云ふでもなく、お世辭が好いと云ふでもないが、妙にへだてのない、懐しいやうな氣がする。思ふにその心に優しきがあるからだと思ふ。

秋聲氏の人物を一括して云ふと、地味な人である。濫かいたころはないが優しいところがある。極めて理智の力の勝つた常識の人である。問へず、悩まず、只何所までも深く考ふる人である。で、接して見ても、その胸まで觸れ、その手を握りしめたいと云ふやうな、切實な願ひと敬慕の念は起らないが、何となく只懐しい人である。優しきのある接し易い人である。

自分は秋聲氏に初めて會つて、然う思つた。

七八

## 水野葉舟氏

或る所で水重葉舟氏に會つた。それは夏の日である。葉舟氏は紺縹の單衣物を着て、黒メリンスの帯を締めて居られた。極めて無ざうさな人で、初めて會つても氣が置けない。色の黒い輪廓線の強い顔立で、その風采から、何から鳥渡田舎染みた風で、此の人が、水野葉舟氏と云つて、小説を書く人かと些つと見は疑ふぐらゐ、無骨らしい人である。

吾れく後進に對して、決して氣位の高い厭やなところが無い。禮も篤いし、言葉づかひなども、自分の同輩以上町寧に話される。却つて此方で恐縮するくらゐだ。初めての故爲か、話をしながら始終伏せ目で、時々チラ／＼と此方を見られる。が、その瞳の線を直ぐ又下に落すか、他に反らして了はれる。そんなこともあるまいけれど、此方で見詰めるその視線を、恐れて避けると云つた風で。

接して見ても、人物に強いところが無い。鋭いところが無い。光つたところがない。目立つた特色のない。廣い意味の極めて普通な人である。圓満な人である。常識の人である。胸に熱情がない。血汐に熱いところがない。普通の温かい血のめ

七九

ぐつて居る人である。人物に深く重いところがない。深いところがない。只一本筋の人である。

葉舟氏の作物には、曲折がない、複雑な色彩がない、只或る事件を描くにしても、單にその事件だけを、さながら一本の鉛筆を以て眞直ぐに線を引いたやうに、何の作物を見ても色や調子が只一筋で、讀者の目には極めて單調に見える。何の作に依つても、葉舟氏の色を見、葉舟氏の句を臭ぐことが出来る。それで、しまひには讀者はその單調に飽きを來す嫌ひがある。その單調——と云ふと、少しく語弊があるが、とにかく何の作でも同一色、同一調子の作物が、葉舟氏の人物を

忌憚なく説明して居るやうに思はれた。葉舟氏の心には曲折がない、複雑な色彩がない。氣や心は變らうけれども、人間の性格は毎日變るものではない。キヤラクターには不變の統一がある。然しながら、統一した性格が嚴としてその人の一生を貫通するとしても、外部の刺撃や壓迫の爲めに、その統一した性格に屈折が生ずる。矛盾が生ずる。重複が生ずる。その曲折、矛盾、重複が、種々の色となつて作物の上に表はれる。葉舟氏の人物に於て、然うした屈折、矛盾、重複した性格を見出すことが出来ない。一本筋の人である、その一本筋の人物が、一色となつて作物の上に表はれるのだ。自分は葉舟氏

に接して、今更ながら、人格則文藝であると云ふことをつくづくと感じた。

## 島村抱月氏

余の島村抱月氏に最初お目にかゝつたのは今年の春四月、暖かな日であつたと記憶する。潜りを入つて先づ玄關に向ふと、左側に木曜日に非ざれば面會謝絶の掲示(?)がしてある。有繋は洋行歸りだけあつて堂々たるものだ。先づ會はない中から感服する。

案内を乞ふと十五六の小僧が取次に出た。刺を通ずると、

早速二階の一室に通されて、少時其所に待つ。隣りの室は書齋と見える。誰れか先客があつて話聲がして居た。待つ間を濫茶を啜りながら先づ室を見る。八疊で木柱は妙に凝つてあるやうだが、借家と見えて惜しいことには建方が何所か粗雑である。襖や疊の上物でないのも目に立つた。何所を訪問しても知名の文士が大抵借家住るのである。一角の文士になつたら、立派な家の一軒ぐらゐ建てられぬものかなど、思つて居る中に、先の客は歸ると見えて、暇を告げて挨拶が交される。抱月氏は客を送り出して置いて、旋て又二階に上つて來られた。今度は余の面會する番だと思つて、少し崩

れた居た膝を正して固くなつて居ると、書齋と障子の襖を開けて入つて來られたのは抱月氏である。逆さになるやうにお辭儀をすると、氏は軽く禮を返して、此方にと言はれる。即ち書齋に通された。書齋は極めて明るい。東と南は一面の硝子張りになつて、室の造りは日本室だが、椅子テエブルなど置いて洋風に使つてある。室には本が面面にごたくと置いてある。それが皆余などには題目だけしか讀めない。赤や青のクロースに針金を曲けたやうな金の横文字で、素晴らしいものである。中には外國の雜誌らしいものもあつた。余に分つたのは早稻田文學の合本ぐらゐのもの。

小さな丸い卓を中に抱月氏と相對した。背の高い人である。色の黒い、眼の窪んだ、額の廣いゆつくりと態度の落付いた、こせつかない眞に學者らしい人だ。有繋は洋行迄しただけの貫目はあると又茲でも感心するより外なかつた。物言ひがゆつたりとして、如何にも落付いて居る。輕佻な所がない。黄色つぼい細い縞の紬の袷を着て居られた。風采はさして大したものではない——と云ふより寧ろ質素な方であるが、抱月氏自身の貫目は風采の如何に依つて上下しない。接して見て何となく尊崇の念を起さずには居られない。聲は餘り高くない。極く靜かで、言葉が激するとか熱するとか云



ふことがない。何時も同じ調子で、一語から一語の間が必らず何秒と定つて居る。緩漫になつたり、急迫することはない。そして、話が首尾透徹して理解し易い。それを後藤宙外氏と比較して見る。人物の貫目に於ても、其態度に於ても、實に雲泥の差である。即ち抱月氏は宙外氏に比して偉らく、どつしりとした重味もあれば、人物に貫目もある。宙外氏は抱月氏に比して偉くなく、どつしりとした重味もなく、人物に貫目もないのである。抱月氏宙外氏共に早稻田出の人である。余は一體感じの上から、餘り早稻田大學を好まぬが、然し、あの殺風景なペンキ塗りの學校から、吾が島村抱月氏の如き人

物が生れたかと思ふと頼もしい。

抱月氏は學者であると云ふ。美學がうまいと云ふ。成程學者らしい様子をして居る。美學がうまいらしい顔をして居る。が、要するにそんなことは何うでも好い。余は抱月氏の人物が氣に入つた。恐らく抱月氏は傘を持たずに途中で白雨に逢つて、縦し其冠つて居る帽子が一個しかないシルクハット、其着て居る洋服が一枚しかない。何とやら服であつても、決して走つたり何かする人ではあるまい。何所までも落付いた何所までも態度を重んずる人と信ずる。

一見して抱月氏は極めて常識の明らかな人と云ふこと

が分る。缺陷のない圓満な人と云ふことが分る。何所までも學者らしい學者だ。

## 後藤宙外氏

近來後藤宙外氏の活動は眞に目覺ましいものである。日本の文壇を一人で背負つて立つた如く、文壇は言はずもあれ、劇界にまで嘴を入れて、論戰苦闘する様を目覺ましいと言はずして何と言はう。總ゆる自然主義を向ふに廻はして、相手關はず食つてかゝる勇氣は恐ろしいものだ。嚙ぞ氣骨が折れるだらうと餘計のことだがお察しする。

余の宙外氏に面謁の榮を得たのは今年の春、未だ肌寒い三月の末、曇れる空に風さへ吹く日の午後、鎌倉雪の下の其書齋に於てゝある。

宙外氏は丈高からず、顔長からぬ方である。色の黒い口髭の濃い、特に其額骨の秀でたのは、一際目立つた。余は嘗つて大町桂月先生の人相學に、觀骨の秀でたるは活動の盛んなる相なりと云ふことを聞いた。成程桂月先生の人相學に偽りはない。宙外氏は盛んに活動する人である。創作も遣る。評論も遣る。雑誌の編輯も遣る。文藝講演會で演説も遣る。訴訟も遣る。怠け者のみ多き文壇に一人吾が活動の人宙外氏を

有するは、以て日本文壇の光榮とすべしである。

一見した所、宙外氏の客に接する態度には、少しの落付きもない。絶えずそばくして居る。煙草を吸ふ。茶を啜る。火箸で灰をいぢる。見て居ても誠に目まぐるしい程の忙しさである。話されることでも然うである。統一した或る話を諄々として首尾明瞭に説き進むと云ふことが出来ない。性分だ。之れを話すかと思へばあれに遷り、あれを話して居るかと思へば、又それに遷る。三つぐらゐの材料を彼方此方と遷るので、吾等は其話の要領を把握するに苦しむ。そして恐しく早呑込みの人である。他の話を終りまで聞いて之を咀嚼す

ると云ふことがない。初めだけ聞いて、後は好い加減な想像で遮つて了ひ、直ぐ自分の思ふことを喋り出す。宙外氏の他人の論旨を攻撃する文章に、往々其論旨を穿き違へて食つて懸る滑稽を見るは、則ち此故であらう。忌憚なく一口に評すれば、性急なのだ。軽卒なのだ。

宙外氏は又極めて自信強き人である。自惚れ強き人である。吾が信ずる所は何所までも眞なりとし、吾が言ふ所を以て何所までも是なりとする人である。自信も、自惚れも頼もしい。然し、それも餘り頑固になると寧ろ滑稽である。又宙外氏は大抱負家で、自然主義など、云ふ魔道に陥れる日本の

文壇を自分の力で救済する意りで居る。其意氣は眞に愛すべしではないか。如斯大抱負も、要するに其頑固なる自信と自惚れとから生れて居るのだ。

余は、宙外氏が今後作家として、不朽の作とまでは行かすとも、到底すぐれたる作物を成し能はざる事を茲に豫言するに躊躇しない。宙外氏は到底作家として立つの器ではない。恐らく今後宙外氏の作物は、従來の作物以上に傑出することは断じてないであらう。或は、最早や創作の泉は涸れて居るかも知れない。吾をして如斯不遜の言を公表するを許せ。余は宙外氏に接して得たる其印象を大膽に告白す

るまでである。若し宙外氏にして今後盛んに創作の筆を執り、其創作にして傑出せる物あらば、余は潔く第一印象録の筆を焼かん哉だ。

最後に余は臍の緒切つて以來、未だ一度しか宙外氏に面會したことはなく、而して恩も怨みもないことを断つて置く。

## 徳富蘇峯氏

午後の二時頃であつた。新聞社で其時刻は忙しい最中である。刺を通じて面會を求めると、通されたのは二階の應接

等である。二十分も其所に待たされた。新聞社の應接室又は何所でもであるが、年々一月一日の附録に刷つた繪を額にしたり、壁に直張りにしてある。文句は忘れたが、何んでも確か教訓めいた徳富洪水氏筆の額が掛けてあつた。そして白紙に十分以上の長談を禁ずとか、何とかいふ、筆太々と書いた揭示ががしてある。

國民新聞は蘇峯氏の主宰する新聞紙である。足一度同新聞社に入いつて見て、情々感せられるのは「蘇峯式」と云ふことである。國民新聞社は専制君主的に蘇峯の主宰する所だけあつて、蘇峯氏の主義主張が、具體的に如何にも能く表は

れて居る。事務室に行つても、應接室を見ても、何れの室にも蘇峯臭味が充満して居る。

など、待つ間を、那樣ことに耽つて居る中に、旋て入いつて來られたのは蘇峯氏である。質素な洋服で、脊の高い肉付のでつぷりとした、見た所如何にも立派な、そして、温厚な紳士である。蘇峯に非ずして阿呆なりとは、口の悪い誰やらの憎まれ口であるが、人物を見た所決して阿呆ではない。蘇峯氏の名と地位に背かざる重みと、貫目とが人物に備つて居る。些つと見は、温厚篤實な君子と云つた風格を具へて居る。廣い額、高い鼻、切れの好い目、半白の頭、同じく半白の口髭、極

めて落付いた。悠々迫らない其態度。道がは王侯貴人の前にも出づる人だけあつて、人物の舉止動作が決して卑しくない。犯し難い威嚴も備つて居る。

余は蘇峯氏を見て、外見的人格の人であると思つた。

先づ相對して腰を下す、テニヅルの上に兩肘突いて、對手を凝つと見据ゑたまふ、決して瞳を動かさず、極めて靜かな、禮に適つた。然し、己れを低くしない言葉を以つて話される。悠々として決して迫らない。落付いたものだ。外見は如何にも立派な人物であるが、然し、それは表面だけで、蘇峯氏の眼光には、何所となく底冷めたい影がある。惡むすい、老獪な光

りがある。人の懷き慕ふ優しい所、温かい所が見えぬ。蘇峯氏は人情を以て動く人ではない。規律を以て動く人である。否、人情を解さぬ人だ。血のない人、涙のない人である。人物が冷かなばかりでなく、表面君子の風を装うて、内心中々抜け目のない人である。自己の名譽、地位、或は利慾の爲めには、敢て如何なる犠牲をも厭はぬと云つたやうな、冷酷な所ろがある。

蘇峯氏は人格の人ではない。其國民新聞の日曜講壇に於て、余は蘇峯氏より屢々偉大なる教訓の聲を聞くが、蘇峯氏の人格として何所に人を教へ導くの資格がある。余は斯る

人物に依りて教訓の聲を聞くを欲しない。他人の犠牲となり得る人の目より、犠牲の徳を教へらるれば、吾等は服することゝも出来るが、他人を犠牲に供してまで自己の満足を得んとする蘇峯氏の口よりして犠牲の徳を聞かせられた所で、吾輩はそれに服することは出来ない。説く其人に向つて、冷笑と嘲罵を送るのみだ。

美はしき人格の人に依りて、教訓の聲を聞けば、吾等は其教訓に依りて、偉大なる感化を受くるも、蘇峯氏の如き人に依りて、人間の道を聞くも、却つて嫌悪と反悪の念を持つのみである。

蘇峯氏は、己れを偽り、人を欺くに巧みな人である。眞實の自己と、人前を飾る自己とは、全く異つて居る。古猫と云つた形だ。二つの自己を持ち得る人間ほど、墮落した、そして憎む可く、卑しむ可く、擯斥す可き人間はない。その落付いた態度、物靜かな、而して丁寧な言葉の中には、他人を冷笑するやうな、冷たい所がある。

蘇峯氏には、剛直にして人に屈せず、何物の前に出づるも、一貫したる自己を曲げないと云ふ、男らしい、そして、尊む可き所がない。權勢の前には己れの腰を屈し、阿諛を送つて、毫も耻としない人である。吾等に對して其堂々たるの風格は

權勢の前に媚ぶるの阿諛と變るのだ。

余は蘇峯氏の如き、自己を二つに見せ得る人は嫌ひである。其人を訓へるが如き、丁寧に、而して、極めて静かな物言ひ、何となく其心の底まで見え透くやうな氣がして、實に堪らなく厭やな氣がした。今少し率直に磊落になり得られないものか。

余は蘇峯氏の人物を見て、何となく老獪なる古猫、油斷して相接しられないやうな氣がした。

## 島崎藤村氏

七月の某日、淺草新片町に島崎藤村氏を訪うた。

最初訪ねた時は、春執筆多忙の故を以て斷られ、縁先より直ちに歸つた。二度目に訪ねたのは、脱稿後 恰度磯部温泉より歸られた其翌日である。

縁側から上つて茶の間を通り、薄暗い裏梯子を上つて二階の書齋へ通された。室は極めて資素な八疊である。文壇の大家の書齋としては、誠にお粗末な室である。

余はは、藤村氏を未だ見ぬ以前嫌ひであつた。別に理由はない、其人物が何となく蟲が好かぬ、所謂毛嫌ひなのである。所が、最初會つて後は、猶更に嫌ひになつた。



客に接して、恐らく藤村氏ぐらゐ、己を巧みに欺く人は少なからう。會つた其態度が、如何にも謙遜である。而も、それが故とらしい謙遜で厭味だ。今少しさつぱりとした態度になれぬものか。

言葉も謹んで恭々しい迄丁寧に、人に對する態度も低い。人を恐れるやうに戰々して居る。恰度人懐きのせぬ捨猫のことく、僻みらしい所がある。活々とした快活な所が些つともない。懐しく接しやうとしても恐れるやうに人を避ける。決して寄せ付けない。寄れば寄る程避ける。繼母の手に育つた拗ね切つた子供と同じである。そして、絶えず用心深く、人の前に少しでも眞の我を見せないやうに、深い注意をして居る。

殊更らしい謙遜の態度と、恐れるやうな用心深い様子と、此の二つが最初藤村氏に會つた時には、堪らなく厭であつた。

余の友に A——某と云ふ男がある。之れは又馬鹿に藤村の好きな男で、一も藤村、二も藤村、頭の上から足の爪先まで藤村に感服して、其作物其思想、其日常生活、何から何まで感服して居る、極端な藤村崇拜家である。

余は此の男に會ふ度びに、藤村氏の作品には及び難いと

ころがある。然し人間は何うも厭だ」と云ふと、A——某は、それは藤村の人物が眞に分らないからだ、分つて見ると中々好い人だ」と云ふ。

で、余も成程、好い人とは思ふ。然し、人物に一種のくさ味がある。何となく毒々しい所がある。然し之れは、本當の藤村氏ではなくて、會つてゆつくり話をして見たら、存外親切な質朴な人だらうとは思へるが、今の所はどうも嫌ひだ」と云ふのを常として居た。全く余は藤村氏を蟲が好かなかつたのだ。

或時——三度目か四度目——雑誌の用事で、朝早く藤村

氏を訪ねた。二三日風邪に冒されて、漸やく今日から床を離れられたとかで、未だ御飯前であつたが、折角來て下すつたのにと云つて室に通された。余は此の日から全く藤村氏を好きになつて了つた。今迄、氣取りだとか銜氣だとか思つて厭であつた點は、藤村氏の長所であることが分つた。

然う分かつて來ると同時に、余はそれまで、心で憎み、人も悪く云つたのが、實に耻しくなつて來た。藤村氏に對して誠に濟まぬ氣の毒なことをしたと云ふ念が痛切に自分を責めた。勿論、藤村先生は日本文壇の有數の大家であるから、余の如き何所に何う生きて居るのか居ないのか、其存在さ

へ分らぬ人間が、好く言つても、悪く云つても、決してびくともされまいし、又其爲め藤村氏の名譽、地位、收入に對して、少しの差し障りもあるまいけれども、余は心の中で何となく濟まぬと思つて居る。藤村氏は全く好い人であることを、余は茲に、聲を大いにして證明する。

其日、藤村氏と相對したる間は、いろく／＼なお話を伺つたり、雑誌の用事を濟したり、一時間の餘であつた。其間に余は藤村氏が好きになつて了つたのだ。

先きには、氣取家、衒氣家と思つたが、藤村氏は決して氣取つたり、衒つたりする人でない。極く溫和な、親切な、物靜かな

人である。氣取ると思つたのも、皆間違ひであつた。

一體、藤村氏は、どうも自分を怖れて居る人らしい。絶えず自分を抑へて、自分に克たう／＼と苦心して居る人である。それで、人に對しても、稍々もすれば出やう／＼とする自分を制して、手綱を締めることに心を用ゐて居られるのが分る。

余は、藤村氏を、常識家の癖に熱情家を氣取る人であると思つたが、それは大間違ひであつた。正反對であつた。藤村氏は、眞の熱情家であるにも拘はらず、努めて常識家とならうとして、居るのだ。自分の狂熱を怖れて、それに克つ可く苦んで

居るのだ。狂熱の力を、冷靜な智の力で抑壓しやうとして居る。自分の狂熱に怖れてそれを抑へやうとして居る。藤村氏は、本當の自分を人に見せることが厭やなのだ。何となく不安で、怖ろしいのだ。人に對して妙におづくしたり、僻みらしいやうな態度の見えるのは、それが爲めなのだ。藤村氏には、氣取つたり、銜つたりする氣は毫もない。否、出來ないのだ。氣取り、銜ふには、藤村氏は餘りに生眞面目だ。

「春」の主人公岸本が藤村氏自身であることは誰れでも知つて居る。其岸本の父が發狂して座敷牢に入られることが同じ「春」の中に書いてある。藤村氏の目を凝つと見入つて居ると、普通の人の目色でないことが分る。藤村氏は正しく狂氣になる素質を持って生れた人だ。然し、今迄狂氣にならなかつたのは、全く此の自制の力ではないかと思ふ。

藤村氏の人物に對しては、余と同じやうな感情を持つて居る人が多いやうだ。然し、それは皆間違つて居る。藤村氏の人物を知らうとするには、藤村氏が發狂の遺傳の爲めに如何に苦んで、それに打克たうとして居るかと思ふことを解かさなければ、本當の藤村氏は分らない。藤村氏の一言、一句、一舉、一動を其所へ結び付けて考へて見ると、藤村氏の態度を領くことが出来る。

それから、藤村氏は妙な田舎氣質のある人だ。例へば苦しき人々を見ても、其中に遺憾なく藤村氏の美はしい所を現はし、一癖のあるのに氣がつくであらう。

藤村氏の人物を一口に云つて見れば、眞面目な、正直な熱情家である。能く人が、藤村氏は計畫のみを大きくして騒ぎ廻る人だと云つて笑ふ。自分は其の所が藤村氏の誠に美しく尊い所だと思ふ。つまり眞面目で正直であるから、傍から見れば、實に馬鹿々々しいことでも、當人は本氣で、一生懸命になれるのだ。人は空騒ぎと笑つても、當人に取つて見ると、實に眞面目な努力なのだ。普通の人の目から見ると、空騒ぎ

らしいことを、眞面目になつて努力の出来るのは、實に羨ましい性格ではないか、自分は斯う云ふ眞面目な、そして正直な人を尊重して、却つて笑ふ人を笑つてやりたい。

藤村氏の體格は、信州の山國に育つた誠に忍耐強きを思はせる。骨組みがしつかりして、腕も太く、筋肉も緊つて、皮膚も厚く硬い、頑健な如何にも堪へ忍ぶ力の強さが想像される。

背は高くはない。づんぐりとした身體である。顔は引きしまつて、髪毛は黒く濃く硬く、眉も一の字に濃い。目の光りも鋭い。

其態度は如何にも静かにそして落付いて居る。

余は、實際藤村氏が好きになつた。正直で、眞面目で、親切で、質朴で、毫も輕跳なところがなくて、眞に畏敬す可き人である。

## 小栗風葉氏

自分が風葉氏に初めて會つたのは、去年の初夏のことである。四疊半の書齋で、北向きの磨硝子から軟らかな光線が入つて、其窓の下に机が据えてあつた。風葉氏は何かこつこつと筆を執つて居られたが、らは大きい方ではない。風采も

極く質素で、木綿總の袴に羽織なしで、黒メリンス帯を締められた。火鉢を中に相對して坐つた。顔の色澤も好く、眼の光りも鋭い。そして身體の隅から隅まで、心地好い程、生々とした才氣が溢れて居る。唇の色が目立つて紅かつた。その聲は活氣が籠つて明晰だ。アクセントが強い。人物に人を壓する力と云ふものは少ないが、その身内に溢れ漲つた才氣で、以て何物が迫つて來ても、弾き返さうとする強い彈力がある。自分は風葉氏の其彈力の爲めに、寄つて行つても胸と胸と相觸れ、相抱擁されることは出來ないと思つた。胸の中に熱い血汐が火とも燃えて居やう、事實燃えて居るらしく見え

た見えながらも尙ほ其弾力の爲めに、寄らば弾ね返されさうな不安があるので寄り得られない。然し、此方に若し其弾力にはね返されない程の重味と力があつたなら、その熱い胸に相觸れて、その懷に抱擁されることも出来やう。自分は初めから其胸の血汐の熱いことが目に見えて居た。そして相觸れたいと吾が心では切實に願つたが、何か言ひ難い不安と恐れがあつて、初めより其胸に抱かれることは出来なかつた。此方から胸を開いて行つたなら、相觸れることも出来たであらう。然し、何がなし只其溢れるやうな活氣に恐れ、最初から吾が胸を開くに自分は餘り憶病であつた。

何か此方で問題を出すと、例の活氣の満ちた、アクセントの強い調子で、公表したら随分さしさはりのあるやうなことで、でも、忌憚なく話される。話に力があつて聞いて、居ても氣持ちが好い。調子が強い。生ぬるいやうなところがない。黙する時は黙し、口を開く時は熱心に話される。懶るさうな聲で、厭や／＼ながらと云ふ調子はない。

それから、風葉氏の性質は極端にはしる。血も心も熱い。情が緊張して居る。罵る時は飽くまで罵り、痛罵を極めねば承知出来ない。然しそれもバツと燃え上る一時の火花、氣が済めば、けろりと忘れて了ふ。そこに風葉氏の渾然としたふく

らみのある人格を見られる。風葉氏の人格には軟らかい大きなところがある。渾然として何物をも抱擁すると云つたやうな、ひろい所がある。胸の底には赤熱まぶしい眞晝の夏のそのやうに、絶えず燃えて居る熱い血汐がある。その血汐をたとへば、長閑な春の日影のうらくと暖かい人を眠らすやうな、軟らかな肉でふつくらと包んだ。さて、その肉を覆ふ皮が、風葉氏の生々とした活氣である、強い弾力を持つた才氣である。その皮に接した人は未だ眞の風葉氏を解するの人ではない。風葉氏の皮のみを知る人は、風葉氏をなつき難い人とも云ふであらう。然し、その皮を破つて肉に接し

得た人は、風葉氏を何がなし温かい人のやうに思ふ。その春の日のやうに和らかな所に包まれて、渾然として酔はされて了ふが、それでも眞の風葉氏を解したとは言へまい。眞の風葉氏を解するには、今一重めくつた胸の底の熱い血に觸れて見ねばならぬ。その熱い血をたぎらして居る胸の底に觸れなければ、眞の風葉氏を解することは出来ない。

で、風葉氏の人格は、然うした三重の要素を以て、出来て居る。熱い血を覆ふのはゆるやかに温かい肉である。その肉を包むのは、弾力性に富んだ皮である。風葉氏は心の熱烈な人である。時に吾れと吾が胸に燃えたる熱血を制するに由な



くて、その肉を貫き皮を破つて火花となつて外部に發する。その時、風葉氏の偽らざる天真、囚はれざる吾れは遺憾なく發揮される。そこに風葉氏の眞價值を見出すことが出来る。心の熱が火花となつて散るその時には、風葉氏は何物をも忘れることが出来る。つくられた吾れを没して眞の吾れを發揮することが出来る。それが風葉氏の偉いところだ。そこが風葉氏の生命である。此の心の熱を火花として發する尊いところを風葉氏から奪つたなら、残る所の風葉氏に何かあるだらう。

あゝした渾然とした大きい所、温い所、軟らかい所は失せて了つて、利害の打算の極めて明らかな、唯、一小才氣ある人となつて了ふであらう。胸の底に漲ざる熱がある。その熱を卒直に現はされるその事が、旋て風葉氏の藝術ある所以であらう。

自分は始めて會つた時に、人格に血と肉と皮の三重がある人と思ひながら、單にその皮に觸つたのみで、肉にすら觸れることが出来なかつた。皮を破つて肉まで入らうとした。然し、最初に於て破るには、肉を覆ふた皮が餘りに強かつた。自分の力では破ることが出来なかつた。見え透いた胸底の血汐に觸れやうと、徒らにいらくとするのみで、未だその

皮の外にうろくして居るに過ぎなかつた。人格が單に一重の人は初めて會つて、意氣相投すればそれで好し、若し然らずは直ぐ離れて了ふまでだ。然し、風葉氏に接すると然うした三重の要素に依つて作られた人格が明らかに見られる。そこで、その底の底にある熱いところまで觸れて見たいと云ふ切實な願が起る。觸れることを願ひながら、その外部の皮の爲めに空しく觸れ得られない時には、まだるくもある、忌々しくもある。

自分は度々會つて、滅茶苦茶に此の皮を破らねばならぬと思つた。破つた。そして胸の底まで觸れねばならぬと思つ

た。

## 大町桂月氏

自分が初めて大町桂月氏に會つたのは、四月の中旬のことである。

桂月氏は、餘り新らしくない縞の袴に、紺縞の羽織を着て居られた。その無さうさな風采と云つたら、之れが有名な大町桂月氏かと疑ふぐらゐである。

背は餘り高い方ではない、丈の短かい人である。口は極めて訥である。然し、決して聞き難くはない。殆んど吃るに近い

が、吃りながらあせらな。普通の人には吃ると必らずあせる。あせるから尙吃るが、桂月氏はゆつくり話される、口が吃して聲の出ない時には、何時までも黙つて、靜かに舌の廻り出すまで待たれる。そのゆつくりとした態度、決して小人に眞似は出来ない。だから訥辯ではあるが聞き苦しくない。ゆかしいところがある。腹の大きい人は、同じ吃りながらも斯うも違ふものかと思はれた。

人物は些つと見たところでは、全るで田舎小學校の教師である。然し、ちつと見て居ると、實に高い所がある。品位がある。重い所がある。又、些つと見ては老年のやうな所もあるが

青年のやうな所もある。桂月氏は老年なのか、青年なのか分らない。老青年である。

話をしながら、始終相手を見据ゑられる。度の強い近眼鏡をかけて、眼の光りは鋭いが、其中に何となく慈愛の影が含まれて居る。優しい温かい所がある。別に愛嬌があるので、ない。愛相が好いのもない。然し、初めて接しても何の遠慮何のへだてもない。極めて懐しい人である。強ひて作つた愛嬌、作つた愛相はないが、天真の愛嬌、天真の愛相がある。初めて桂月氏に接しても、人は初對面であると云ふことを忘れて了ふ。滾然として其人格に抱擁されて了ふ。恍とりと酔は

されて了ふ。それが桂月氏の人格の大きい所だ。心が廣い所だ。その心には何人誰人を問はず、抱擁するだけのゆるやかな度量がある。

桂月氏は情にもろい人である。心の弱い人である。涙を心にたくばへた人である。人を憎み、人をころすと云ふことの出来ない人である。筆の先では随分悪口を言ふ。然し、其悪口には毒がない。にくげがない。同じ悪口でも温い所がある。優しい所がある。之れ桂月氏に毒がないからだ。心に優しい温い所があるからだ。桂月氏の悪口は、親が子に向つて云ふ悪口である。悪口を言ひながらも、その悪口の裡には慈悲と涙がある。

桂月氏には少しもぶつた所がない。氣取つた所がない。青年には同じ青年のやうな心持ちになつて接する。吾れを一段高きに置いて、人を其下に見下すと云つたやうな厭味がない。桂月氏の心には吾れも人も同等である。

桂月氏は天真流露な人である。己を以て偽り飾り銜ふと云つたやうな事はない。何所までも卒直に自己を暴露して決して之を愧ぢられない。無邪氣である。天真爛漫である。悪きを以て悪しとする人である。自分の罪を覆ふて罪を脱れんと云つたやうな卑怯な振舞より、男らしく吾れと吾れが罪

を告白して、潔よくその罪に服すると云つた性質の人だ。

初めてお目にかゝつた時に酒を飲まれた。自分は飲めない口なので控へて居ると、自分でついではちびりくくと飲まれる。桂月氏は酒中の趣を解する人、酔ふて亂すると云ふやうなことはない。酔ふて益々面白く、益々愉快に、多く辯ずる人である。盃が手から放れた時には、煙草が必ず手にある。桂月氏は煙草も能く吸はれる。

桂月氏は、一度會つて忘れることの出来ない人である。

## 吉江孤雁氏

自分が初めて吉江孤雁氏に會つたのは、月の好い、初夏の或る宵であつた。孤雁氏は、早稻田在學中から既に一部の人にその名を知られた。その生々とした自然の空氣を描く筆の美しさと、自然の觀察が如何にも正しいのとで、或る人は孤雁氏を目して、日本のツルゲネーフとまで賞揚した。然し、その華やかな聲名もほんのバツとした一時の花、一年と経ない中に孤雁氏の名は人の耳に遠くなつた。

自分は孤雁氏に、その大久保の下宿で會つた。年の若い些つと見は、ほんの子供のやうな人である。眼の大きな、顔の圓い、脊は低かつた。顔にも、聲にも、毒氣のない。如何にも子供々

々した物をくよくよく考へたり、憐んだりすることのない、至つて無邪氣な人のやうに思はれた。自分は嘗て新古文林で孤雁氏の赤城山と云ふ、極めて自然の觀察に富んだ——恰度南歐の平和な山村の油畫を見るやうな紀行文を面白く讀んだことがある。その紀行文中には、青葉がくれにチラチラと白い手拭や赤い襦袢を見せて、桑を摘む乙女が居る。牛を飼ふ收童が居る。森がある。湖がある。草を分けた里の小逕を辿る二人の青年——自分は然うした自然の様を、情緒深い思ひと筆とで描いた文を見て、孤雁氏を如何に想像したらう。然し、その想像は會つて見て、がらりとはずれた。孤雁氏は

その文章に現はれたやうに、美しい人でない。打ち見たところ、あゝした深い情緒を持つた人ではない。自分は孤雁氏の人物を見て、別に或る特殊の性格を見出すことを得なかつた。普通の人——青年らしい青年であると思つた。

## 内田魯庵氏

初め二三度行つて不任であつた。魯庵氏は文壇の元老である。或は吾等如き後進に面會するのがうるさいので、居留守を使つて體の好い門前拂ひを食はせられるのではあるまいか、會ふのが面倒なら、正直に面倒であると言つて貰へ

ば、何も強ひて其上押して會つてくれとは言はぬ。居留守を使ふなど、云ふことは不都合至極であると、少なからず憤慨したものである。

余の魯庵氏に會つたのは丁度四度目であつたと記憶する。取次に出た女中に來意を告げて、面會の榮を得たいと頼んだ。女中は二階へ上つて行つたが、旋て足音軽く降りて來て、「どうぞお上りなすつて……」と云ふ。女中の後に隨いて案内されたのは、二階の六疊である。襖一室隔て、次の室が魯庵氏の書齋だ。與へられた坐布團に坐つて待つて居ると、直ぐ出て來られたのが魯庵氏である。余は其人を一目見て、自

らの不明を衷心耻ぢた。魯庵氏は決して居留守を使ふが如き人でない。先に訪問して不在であつたのは、折悪しく三度とも全くの不在であつたのだらう。

年は五十ぐらゐ、頭が少しく禿げて白髪が混つた、丸々と能く肉付いて皮膚の色がつや／＼として居る。眉と云ひ、目と言ひ、始終にこ／＼と言ふに言はれぬ優しい笑顏を見せて人に接しられる態度と言ひ、余は會つて如斯圓滿なる、玲瓏として玉の如き人格と、其優しい温容と、一點批難す可き點のない完璧なる態度とを有した人に、臍の緒切つて以來會つたことがない。好い人である。實に好い人である。余は、吾

が文壇に魯庵氏の如く、態度も備はり、一家の見識もあり、そして正直で、優しい、心の美しい人の無いことを斷言する。

魯庵氏は人格として完全圓滿な人である。心と行ひと相同じく、其心のみを擴げて見せても、決して人の前に耻ぢるが如き疚しさのない人である。人として美しき心は、其顔に現はれて居る。如斯人に、何うして人の前に耻づるやうな心の罪が犯せやう。由來、小説家とか文士とか云ふ連中は、神経質で、僻みや嫉妬心が強く、拗ねた皮肉な根性で、人を付度する心が強く、女のやうに厭味なものである。殊に近代思潮の影響を受けた現代人になると、極端に然うした惡魔的暗黒

面が尖つて發達して居る。人を信じ、人を頼る、人間自然の美しさが全く欠けて居る。僻み、嫉妬、猜疑、忖度、廻り氣の白い目で、絶えず人を見、人生を見て、天真にして愛すべき所がない。現代人の有する所は、疑ひである。呪ひである。憎みである。美しい悦びと、祝福とは現代人の胸にない。如斯は時代の罪か、現代人それ自身の罪であるか、茲でそんなことを詮議する必要はない。兎に角吾等の世に、未だ見ざるものを誠として信じ、人の喜びを、祝福する美しさの亡びたのは、花の咲き鳥の謳ふ春の長閑さを失つた自然のやうに淋しいものである。彼れ等の人を見る目、それは、實に憎む可き獸の眼である。



恐る可き悪魔の眼である。悪魔！悪魔？現代人の心は悪魔である。

恐ろしい悪魔の其中に、吾が魯庵氏の如く、天真圓滿なる人のあるのは實に嬉しい。余は如斯人に接することが好きである。とは云ふものゝ、魯庵氏も同じく人間であり、同じく現代の空気を呼吸し、現代の思潮の中に、動搖して居る人であつて見れば、ダークネツスな色を帯びた現代人通有なる悪魔的性質が、其血の中に混じて血管を廻つて居るに違ひない。而もそれが、現代人の如く露骨に現はれれいのは、その高い人格に依つて陶冶され、掩はれて居るのである。

魯庵氏は識見の高き人である。現代の思潮に觸れながら、而も之れを達觀し、批評して行く人で、決して其渦中に巻き込まれてあへぐやうなことはしない。現代思潮に觸れ得ざる人ではない。觸れて而して批判し、理解して居る人である。漱石氏は、所詮現代思潮の悪魔的傾向に觸れることは出来まい。觸れることは出来ぬから従つて現代人の傾向に對する理解もない。漱石氏は全く現時代と没交渉で、其體には現代人の胸に通ふ血とは、全然別時代の血が通つて居る。漱石氏は何うしてもロマンチック、乃至クラシックの人である。吾等との交渉は全く無いと言つて好い。其所へ行くと魯

庵氏の思想は吾等と餘程接近しても居るし、且つ密接なる交渉もある。

漱石氏は床の置物である。飾つて置けば賑かでもあるし、疲れた時些いと見れば退屈凌ぎになる。然し、魯庵氏は未だ床の置物ではない。まだく時代と交渉ある生活の充分出来る人である。床の間の置き物たる漱石氏が現時の文壇に活動して、現代と交渉ある活動の出来得る魯庵氏が沈黙を守つて居ると云ふのは、主客轉倒ではあるまいか。此の人をして、今のまゝの沈黙に居らしめるのは、如何にも惜しい。余は魯庵氏の活動を切に望むものである。批評家としても現

代の群小批評家に卓越せる識見がある。作家として縦横の才がある。翻譯家としての學識もあれば、細心なる忠實もある。何れの方面に活動せらるゝも、決して現時の文士諸君の後に居る人ではない。

魯庵氏は亦極めて座談に巧みだ。余は曾つて氏の如く、話材の多く、而も何物に對しても卓れたる一種の見解を有せる人を見たことがない。客に接して一分時と雖も、決して沈黙せらるゝが如きことはない。すらくとして流るゝ如き巧みなる辯説は、其唇を衝いて絶えず滑つて居る。然し、曉舌とは全然其意味が違ふ。同氏の口を衝いて縷々として出づ

る所の座談は、皆立派な論文である。座談は直ちに文章である。先天的に辯舌の巧みな人で、一言と雖も、一句と雖も、澁つたり、行き詰つたりしない。圓轉滑脱、縦横自在なもので、吾等如き後進に向つても、吾が見解を縷々として説いて倦まない。之れを聞く人も決して其長きに倦むが如きことはなく、傾聴して居る間に、縦しそれが自分の意見とは反對であつても、頷かずには居られない。魯庵氏は眞に座談の天才である。魯庵氏に一度び接した人は、必ず其巧みなる座談に魅せられて了ふであらう。

魯庵氏は客を喜ぶらしい、其塵忙しい時に、如何なる人が

訪問しても、必ず之れを迎へて快く話される。そして話の中に、實の圓滑なる皮肉の妙を見る。魯庵氏の如く遠廻しに、巧みなる皮肉を云ふ人は少い。余は漱石氏の皮肉よりも、寧ろ魯庵氏の皮肉を愛する。漱石氏の皮肉は、眞面目くさつた面をして言ふ皮肉である。魯庵氏の皮肉は、笑ひながら言ふ皮肉だ。

繰り返して言ふ。余は魯庵氏が好きである。たまらなく好きである。

見える。髻鬚として目に見える。其頭の禿げた、少し白髪のある、二重瞼の目尻の下り氣味な、肉付と血色との好い、丸い

艶々とした顔に、絶えずにこくと浮ぶ其人懐かしい笑顔するくと巧みに滑る其の辯舌、其齒、其唇、其態度、繪に見る七福神の布袋を今少し瘦せさして、縮りを付けたやうな其姿、思つても懐かしく吾が目には浮ぶ。

### 與謝野晶子女史

晶子女史は天才である。一度び此の天才の胸を徹したる聲を聞けば、歌も單なる歌ではない。總ゆるものを絶して、自らの感情を、大膽に、率直に、掩はず、隠さず、偽らずして歌ふところ、女史の歌には、歌として以外更に尊い生命がある。權威

がある。

余は此の女流天才歌人に面會するのを、此上なく光榮とした而も其會つたのは唯の一度、それもほんの短時間、十分ぐらゐであつた。然し、余は其十分間に、微細なる注意を以つて女史の總べてを見た意りである。

女史は、紺緞の單衣を着て、襦子とメリンスの腹合せの帯を締められた。不斷ではあるが、極めて無雜作な風采で、髪なども、後ろの方に束ねて、そゝけて居た。柄の小さい、顔の少し長味な、色の白い人で、見た所美人の方ではない。始終うつ向いて、右の手を前に疊に突いて、それをもちもち動かしながら

ら、其指先を凝と見詰められる。決して顔を上げて、人の顔を正面に見ると云ふやうなことをせられない。言葉はねちねちした切れの悪い調子である。そして、極めて謙遜の言葉を使はれる。一見した所、之れがあゝした奔放な、熱烈な情の高調を歌ふ天才歌人であるか、此の人の何所からあゝした聲、あゝした響きが出て來るのであらうと疑はれる。

余は女史を今少し、天才的に熱烈な所のある人と思つて居た。所が、其顔、其目、其態度、——歌に見るが如き天才的の所が少しも見えない。一見平凡なる只一個の婦人に過ぎない。世帯やつれた姿も振りも關はない世話女房である。あの熱

烈な、何物をも焼き盡すの概ある情熱は、此の人の何所に藏されて、何所から迸り出されるのか、乳呑み子ある婦人に能く見る、少し襟元のはだかつた、チラと見えた白い胸先、單衣の外に明らかに分る高く盛れた乳の邊り、余は、何か鋭利なる刃物を以て突き破つて見たいやうな氣がした。其所より迸り出づる紅みの熱き血汐、あゝ、其血汐の中に、あの情熱は含まれて居るのであらう。要するに如何なる天才の生命も、其中を流るゝ熱い血の中にあるのだ。膚一重の外は、天才も凡才も何の變りはない。

女史は極めて謙遜な人である。淺猿しい婦人の見えも虚

榮もない。余は晶子女史ぐらゐ、女として如何にも女らしい人は少ないと思ふ。

大抵の女なれば、歌の一首も作り、小説の一篇も書けば、最うそれで閨秀作家を氣取り、心の矜りを人前にもチラ付かせる。其所が女の淺猿しい所である。養ひ難い所である。女と云ふ動物は謙讓の美德を、全然解するの能力なき動物である。女史には、其厭な、女の淺猿しき虚榮と矜りが無い。殆んど、自分の天才であることも、歌人として一流の地位にあることも知らないと言つた風である。余は婦人としての人物の美しさを、女史に於て、始めて之れを見た。姿や、様子は縦し

や何うあらうとも、其人格にして清く高ければ、人間として之れ程床しい。尊いことはない。

余は、女史に面會して、此の天才女流歌人が、何の不平もなく、不満もなくして、平凡の婦人の務むべき主婦の務めに服して居られるのを見て、心から床しく思ふと同時に、此の天才をして平凡の婦人と同じ務めに服せしめなければならぬ、人間の約束を悲み、天才其物の爲めに其悲惨を嘆じた。天才をして人間の約束に従はしめるぐらゐ悲惨なことはない。家庭を持ち、子を産み、之れを育てるは、愚衆婦人の仕事である。天才には他に、より以上の尊い意味ある要求がある。天

才は個人の獨占すべきものではない。

余は女史の歌に依つて、人間の約束の爲に束縛されたる、天才の悲しい叫び聲を聞くことがある。そして、其聲は何時も余の胸に哀切なる響きを傳へる。余は、其度びに天才者の悲惨なる運命を思つて泣く。

其歌に依つて其人を尊敬し、其束縛されたる悲痛の聲を聞いて、未だ見ざる天才の爲めに、衷心より悲しんだ余は、一度び接して其人物の床しきを思つて、更に尊敬の念を加へ、其束縛されたる天才の姿を見て、更にそれを悼むの念を増した。

## 泉 鏡花氏

三月の中旬、春の日の暖かい或る日の午後、逗子に泉鏡花氏を訪ふた。停車場からものゝ五丁も行つて左りに曲り、少し行つた直ぐ其左側に鏡花氏の寓はある。二軒つゞきの二階建、向つて右がそれである。格子戸を開けて案内を乞ふと、言葉で直ぐそれと領づかれる露むき出しの金澤辯の書生が取り次に出た。

茶の間を通つて二階に通される。二階は六疊の二間になつて、入つた直ぐは寢室らしく、其次の東南の廻窓になつた。

明るい六疊が鏡花氏の書齋である。不斷執筆される机は小さい經机で、その上には校正刷の紙が載つて居た。左りの方に大きい机が置かれて、上には本などが置いてある。床にはあつさりした一軸が懸つて、紅葉全集が六冊箱に入つた儘綺麗に並べられた。

そして、室の中に置れた本箱の上に、紅葉氏の寫眞が飾つてある。自分はそれを見て、鏡花氏が如何に其師匠紅葉氏を想ふの念篤きかを思ひ、床しく懐しく感じた。

先づ初對面の挨拶をする。自分は鏡花氏を會はない以前に想像して、非常に氣難しい、尊大な人のやうに思つて居た

が、會つて見ると、何うして極く氣輕な、隔てのない、中々愛想の好い人である。今迄晝寢をして居られたものと見えて、黄色つばい寢衣をはを、つて居られたが、其所に脱いであつた黒い紋付の羽織に着更へられた。背は高くない、どちらかと云ふと小作りの方で、髪を少し長く刈り、目立たないやうに分けられた。色の白い一體に脾弱さうな顔で、唇は思ひ切つて締り、目元から鼻の工合、男のいかつい部分は割りに少なく、女女しく俏に出來て居る。金縁の近眼鏡を掛けて、着物は艶のあるのを着られたが、少しもにやけた厭や味な様子は無い。どちらかと云ふと、商人風の勝つた、極く眞面目な人が



らである。お顔を一目見ると、如何にも神経質で、成る程あゝした思想の作を書かれるのも尤もであると頷かれる。聲は涼しいハッキリとした聲だが、其聲には男らしい響と力がない。お話は餘り上手でない。殊に議論は得意でないらしい。色々なお話を伺つて居る中に、鏡花氏の思想が、現代といふものに没交渉であることが分つた。鏡花氏の作物に依つて、現代の苦がい、苦しい、暗い色に觸れることが出来ないやうに——鏡花氏の作物に全然現代と云ふものが閑却されて、現代と無交渉なる夢のやうな空想が描かれて居ると同じやうに、鏡花氏の胸は現代思潮の陰鬱な暗い毒々しい氣に

觸れて居ない。其鏡花氏にして初めてあゝした作物を描くことが出来るのだ。鏡花氏の作物が現代に根底を置かず、現代思潮と没交渉なやうに、鏡花氏の人物乃至思想其物が現代の思潮に觸れて居ないのだ。其趣味嗜好は全然江戸時代の文學——所謂江戸趣味によつて養はれて居る。その思想は紅葉時代の美とか通とかを喜んだ思想に全然固められて居る。斯うした趣味嗜好を有し、斯うした思想に固められた鏡花氏の作物に、現代と云ふものが無視——と云ふと語弊があるが、閑却されて居るのは、餘儀ない事實である。當然の事である。

神秘も好い。空想も好い。が、其神秘や空想や必ず現代と云ふことを無視してはならぬ。現代を無視した——無視しない迄も閉却した文藝は、現代に於ける生命の無い文藝である。鏡花氏の文藝がそれだ。神秘の底、空想の中に、現代思潮の片影でも流して欲しい。あの技巧、あの空想を有しながら、惜しいことに鏡花氏は現代を閉却して居る。鏡花氏にして今少し現代を尊重し、現代の思潮に觸れるやうに努め、そして、現代に根底を置いて、あゝした神秘、あゝした空想を描かれたら、其作品は必らずや、今の鏡花氏の作品の如く無意味なものではあるまい。お伽噺的のものではあるまい。あの技

巧、あの空想を有しながら、現代を閉却して居るのは、惜しいことである。返す／＼も惜しいことである。

話をしながら能く煙草を吸はれる。お茶を飲まれる。其態度に落着がない。づつしりと重々しい所がない。で、些つと會つたばかりの時は、其人物を實に軽々しく見せる。輕佻に見せる。江戸趣味、江戸趣味と云ふと、吾人は何故か戯作者を聯想する。鏡花氏の人物が何となく軽々しく見えたのは、之れも要するに其江戸趣味から來たのではあるまいかと思つた。

兎に角く鏡花氏は、想像とは全然相反した人であつた。

## 徳田秋江氏

體の瘦せて背のやゝ高い人である。鼻は高く、頬はこけて、濃い髪は思ひ切り長く刈つて分けた。身體が瘦せたのと、其風采を餘りに關はれないので、鳥渡會つた時は、氣の毒な程貧弱に見える。人物の影が薄いやうな氣がする。然し、それは初めの些つと見だ。能く見ると眼の光りが鋭い。人を見るその眼色が平凡な人とは違ふ。何所か非常にデリケートなところがある。神經質な暗いところがある。

自分は初め、秋江氏に或る人のところで會つた。その或る

人の塊偉な姿にくらべて、秋江氏を見すばらしく思つたが、能く見て居る中に此の人の鋭いところが見え出した。頭の中が恐ろしく動搖して居るらしい。絶えず何かに襲はれるやうな不安に心が慄へて居る。何を見ても、何に臨んでも、世の中のこと——人間の總べてに不平があり、不安があると云つた風の人だ。しつきり無しに心がいらくして居ると、ついたりとした落着きがない。何物にも不平があり、何物にも反抗し、何物をも呪ひ、何物をも破壊したい——世の中を敵視した人だ。然し、悲しいことには、秋江氏には強い所がない、思ひ切つて何事も自らやると云つたやうに、積極的のこ

ろがない、不平を抱き、反抗をし、世を呪ひ、人を呪ひ、破壊を願ひながら、それを實行し、斷行する勇氣が無い。力が無い。然うした今にも破裂し、さうな熱烈な思想を抱いて、それをちりちりと壓へて行く人だ。實行し、斷行する勇氣は無くとも、せめて空吼へにでも吼へ、狂へれば好いが、それも出来ない。外部の然うした壓迫を強く感ずれば感ずる程、心は反抗の熱に焼けながら、一層深くその反抗の力を逆に、ちりちり中に抑へて忍ぶ——充り、力學上で云ふ歪力である。ゼンマイは捲かれ、ば捲れる程、その反撥力は強くなりながら、だんだん捲れて行く。秋江氏は恰度然うした性格の人らしい。破裂

しやう、反抗しやうと力みながら、而もちりちり、巻き込まれて行く。決して反撥の力が無くて、巻き込まれて行くのでは無い。巻き込まれ、ば、巻き込まれる程、益々反撥力は強くなつて行くのだ。強くなつて行きながら、反撥することも出来ずに巻き込まれて行くのが、情けないゼンマイの運命だ。秋江氏が丁度それだ。四圍の壓迫を感じて、反抗心が強くなれば強くなる程、その反抗心を押へて行く。充り消極的に強い人と云ふことが出来る。

然うした反抗心をいらくししながら抑へて行く結果、秋江氏には何所か、皮肉なところがある。反抗心を抑へ抑へて、

それを破壊さすことが出来ない、それで仕方なく皮肉に出る。反抗心をじつと抑へながら、フ、ンと鼻の先で笑つて退ける。秋江氏のフ、ンには餘裕がない。その皮肉は引き詰つた皮肉である。秋江氏は夏目漱石氏のやうに、超然として皮肉を言ふ程、未だ時代に遠ざかることが出来ない。漱石氏の皮肉は碁打ちの皮肉である。お茶を飲みながら、煙草を吸ひながら、乃至小便をしながら言へる皮肉である。ゆ、とりのある皮肉である。笑ひながらぼ、つり、く、と言つて退けると云つたやうな皮肉である。故に漱石氏の皮肉は小面が憎い。之れに反して秋江氏の皮肉は苦しい皮肉である。眞面目な皮

肉である。人と議論して、口先でかなはず、ちく、く、口惜し涙を滴しながら云ふ、切ない皮肉である。涙の含まれた皮肉である。だから厭や味なところはあつたが、然し、切實な皮肉だ。人にえ、ら、屁と云ふものがある。腹の上に重い物を載せて、其重みに壓迫されて思はず出る屁を、自分の國ではえ、ら、屁と云ふ。這麼た、と、へでは失禮かも知れんが、一番適切だから自分は敢て云ふ。秋江氏の皮肉は恰度此のえ、ら、屁である。漱石氏の皮肉は、麥飯を食つたり、焼芋や炒り豌豆を暴食して、腹の張つた時に氣持ち好くブンと出る放屁である。そして放つた後で當人はフ、ンと笑ふ。成程當人は腹の中の惡瓦斯を

一發の放屁に依つて放つて、誠に氣持ちが好からうが、傍で聞く人は癢だ。小面が憎い。然し、何となく又滑稽味もあつて、小面の憎いながらもおかし味がある。時には聞く方でもフ、ンと笑ひたくなる。漱石氏の皮肉は茶的趣味を帶んで居る。菓子で言へば鹽せんべいだ。軽いところがある。秋江氏の皮肉は苦しい切ない眞面目な皮肉である。心中のいら／＼した情が抑へんとして抑へ切れず、抑へながら餘儀無く出る皮肉である。當人も眞面目だ。聞かせられる人も眞面目だ。然し、皮肉本來の意味から云つて、秋江氏の皮肉は時に厭や味として聞える。弱者の聲として聞える。之れ餘裕の無い皮

肉だからである。秋江氏が未だ超然となり得る程、而く現代離れが出来ないからだ。超然となり得ざるからだ。暢氣になれないからだ。

秋江氏は友と合つて痛飲しながら、不平不満を吐露し、氣焰を吐くと云つたやうなことがないであらう。で、尙更に不平や不満が腹の中でむしやくしやす。いろ／＼する。その鬱結する情をやるに由なくて、それが遂ひに苦しい皮肉となつて出ることがあるのであらう。

自分は秋江氏の何所か、斯う亡くなつた齋藤綠雨に似たところはないかと思ふ。綠雨に或る一面酷似した性格をそ

なへながら、未だ緑雨ほど、自惚れることが出来ず、よがることの出来ない人であるまいか。

齋藤緑雨は未だ自己の眞價を解さなかつた。餘りに自己を過大視した。故に勇氣があつた。吼へた。狂つた。誰れにでも食つてかゝつた。秋江氏は現代人の通有で、己れを能く解して居る。故に緑雨ほど盲目蛇でない。無鐵砲になれない。

自惚れたものには勇氣がある。自己の眞價を自己以上に買ひ被つた者には何物をも恐たないと云ふ強いところがある。世の中の人々は斯う云ふ人を見て、盲目蛇と云ふ。無鐵砲と云ふ。自惚れと云ふ。盲目蛇でも、無鐵砲でも、自惚れでも

その勇氣が嬉しい。強いところが嬉しい。自惚れも當人に取つては動かし、堪い自信である。現代人——殊に青年の通弊は、己れを観ると云ふことが餘りに明らかになつて来たことだ。己れを見るの明あるのは嬉しいことだが、今少し自惚れがあつい欲しい。

繰り返して云ふ。秋江氏は故緑雨に似たところがある。然し、緑雨ほど自己を買ひ被るに、秋江氏の己れを観るの眼は、餘りに鋭い。故に緑雨のやうに同じ不平不満の子でありながら、緑雨に比して、更らに一層其苦悶が深い。

## 小山内薫氏

小山内薫氏は大學出の小説家である。何かの雑誌で、其寫眞を拜見した時には、餘程ハイカラのやうにお見受け申ししたが、會て見ると全で子供である。頭なぞ坊主刈りで、夏のことであつたが、筒袖の浴衣を着て居られた。多分年は二十八、稍々三十近いこと、思ふが、打見た所二十二三ぐらゐの書生のやうである。卑俗に男は年より多く見えて、女は年下に見られるのが好いと云ふが、那樣ことは何うだか分らない。兎に角、年よりは若く見える。

目の切れの好い、鼻の高い、顔の整つた人である。些つと見た所は、極く眞面目な人で、別に才子風な所はない。鼻が悪いと見えて、何うかすると聲が鼻にかゝる。態度に氣取つたり濟ましたりする厭味がないのが、余は何より好きである。

薫氏は其作物に見るが如き、才走つた人ではない。接して見て文士らしい匂ひもない。見た所何うしても事務家か、或は新聞記者である。人物に、白鳥氏とか、青果氏に見るが如き、一種特殊の點がない。如何にも普通の人らしい。

余は、薫氏を以て、文士と云ふよりも、寧ろ一種の事務家と信ずる。文士としての成功よりも、事務家としてより以上成



功される人であると思ふ。其創作の才よりも、寧ろ事務の才に長じた人であると思ふ。

余は、薰氏の生れ乍らにして、作家たるの天分豊かなるや否やを疑ふ。其才で小説を作る人であると云ふのは、薰氏の定評である。余も薰氏の小説を讀む毎に、而く感ずる所の一人である。

其小説を才で拵らへると云ふ。然し、或る事件なり、人物なり、書く材料其物までを才で拵らへると云ふ意味ではない。或る人物、或る事象に對したる時、何物かを感じ得た時に、直ちにそれを材料として、其人物、其事象、其感じを書かれるに

違ふない。其所までは他の作家と毫も變りはない。然し、薰氏の小説に才を弄したるの跡を見るのは、觀察、及び取材に非ずして、描寫にあると余は思ふ。即ち、觀察も、取材も、材料に對する感じも、書かれるものも、必らず薰氏自身の見、而して感じられた所に、違ふない。而も出來上つた小説に、其才氣を弄したるの跡を何れの作物に於ても見るのは、薰氏の筆を執る時の態度——心持にあると思ふ。或る事象を觀察し、或る材料を見て、或ることを感じた時、薰氏は先づ、此の材料を如何にして描き、如何にして好き小説とせんかと云ふことを考へられる。此の如何にして好き小説となさんかと云

ふことが、薫氏の眞實感じたる所を描いた作物でも、出来上つた所を見ると、才を弄したる跡の見ゆる所以である。即ち、薫氏の創作に對する態度は、如何にして此の材料、此の感じを偽らずして、眞に描寫せんかと云ふよりも、如何にしてすぐれたる小説とせんかと云ふ考へが勝てる故に、出来上つた小説は、作者の眞實なる感じは出ないで、才を以て拵らへたらしく見ゆる所以であると思ふ。充り、分れる所は筆を執る時の態度——と云ふよりも、小説其物に對する態度にあると思ふ。

余の薫氏を以て、作家たるの天分如何を疑つて、寧ろ事務家として才を推獎せしむる所のものは、其所にある。即ち薫氏は小説を書き度くて堪らず、書かざるを得ずして書くの人ではない。多讀した結果、蓄へたる所の小説に對する智識を應用して、自己の感じを書く人である。感ずる人であるかも知らないが、余は、薫氏の描寫の天分如何を疑ふ。從來薫氏の作物の描寫を見ると、薫氏自身の自らなる天分を其中に多く見出すことが出来ない。多讀の結果、頭の中に收められたる所のあらゆる小説の形式を借りて、自分の見た所、感じたる所をその形式に當てはめて現はす人である。故に形式が第一になつて感じは第二になる。従つて、其作物は如何にも

才を以つて拵らへたやうに見ゆるのだ。

## 正宗白鳥氏

余は、初め白鳥氏に面會した時、其描かれた作物中の人物を面のあたり見るやうな心持がした。

夏の初めのことである。鼠色が、つたネルの單衣を着て、稍々古くなつた縮緬の兵子帯を締められた。背の低い小さい男である。色が黒く、眉が濃く、顔の何處かにほくろがあつたやうに覺えて居る。顔に表情のない人で、對談して居ても、少しの變化もない。始終同じやうに冷たい顔をして居られ

る。怒つて居るのだから、喜んで居るのだから、悲しんで居るのだから、些つとも分らない。恐らくは、又悲しむこともない人であらう。此方で何うしても、雷同して調子を合せねばならぬやうな話を持ちかけても、相變らず同じやうな調子で、少しの變化もない。氣抜けのしたやうな氣がする。何か笑はねばならぬやうなことがあつても、決して聲を立て、笑はれない。僅かに唇の邊りに皺を寄せて、その鼠のやうにこまかい齒並の好い、白い齒を見せられるだけだ。

余は、白鳥氏は冷笑以外に、情の働きのない人だと信ずる。何物も冷笑し切つて居る。親も、兄弟も、友も、吾自身すらも冷

笑して居る。何うして此の人に優しい所、温かい所があらう。覺めて、冷え切つた人である。笑ふことも出来なければ、夢を見ることも出来ない。唯、冷やかに醒め切つて居る。總ゆるものに對して、冷笑と皮肉とより外にないのだ。人生に對する興味もなければ、生に對する執着もない。面白くもなければ、又感興も湧かない。生きん爲めに生きて居るの生に非ずして、肉體が未だ滅びないから餘儀なく生きて居るのだ。斯う云ふ人は、生きたいこともなければ、また死にたいこともないであらう。只、生まれて育てられたから大きくなり、腹が空くから飯も食ふ、食ふには働かねばならぬから仕方なしに

働く、同じく人間と云ふ動物であつて見れば、生きて居る間は生殖慾の衝動も起るから、女にも接する。生きて居ることも、働くことも、飯を食ふことも、女に接することも、斯う云ふ人にとつては、決して愉快でもなければ、又樂みでもない。只、仕方ないと云ふことに支配されて動いて居るのだ。則ち、一たび此の世に生を受けて生れ出でた因果に、動物性の要求に仕方なしに動いて居るのである。

由來人間の感興とか、快樂とか云ふものは、現實を離れて、夢を見るから起つて來るのだ。現實を忘れて醉ふことが出来る人には、感興も起れば、従つて快樂もある。然かし、醒めた

る人間は夢を見ることが出来ない。酔ふことが出来ない。現實を離れることも出来ない。又現實を忘れることも出来ない。夢を見て酔ふことの出来ない人生ぐらゐ、寂しい、そして、悲惨なものが又とあらうか。元來人間の生存其物は、無意味な、そして苦痛なものである。造化は巧妙である。この苦痛な、そして無意味な生存に執着させる可く、人間に夢と云ふものを與へた。總ゆる希望も、光明も、快樂も、愉快も、皆夢から生ずる。愚かなる人間は、此の空なる夢に欺かれて、無意味な、そして苦痛な生存をも樂み、執着する。自覺したる人間は、再び此の夢を見ることが出来ない。即ち欺かれて樂しむこ

とが出来ないのである。自覺したる人間は、恰度、其昔罪を知らざるイヴが、蛇に欺かれて智慧の果實を食つたそれと同じことである。一たび自覺と云ふ禁制の果實を食つた現代の人間は、如何に悔恨しても、再び先の夢を見得られる樂しい生に還ることは出来ぬ。夢を見得られる人生をエデンの花園の君としたなら、夢より醒めた人間は、永久に冬より四季の移らぬ砂漠である。自覺と云ふ禁制の果實を食つた人間は、エデンの花園より、淋しい果てのない砂漠に放り出されるのだ。何處まで行つても、青い木もなければ、白い水もない。此の無味なる人生の大砂漠を、永遠にコックと辿らな

ければならないものとしたなら、其人の心でらる世にも哀れな、そして悲惨なものはあるまい。近代思想の潮流に觸れた人々は、皆此の無味な何處まで行つてもオーシスのない人生の大砂漠を永久に辿らなければならぬ苦痛を嘗むる悲惨な運命の人々である。白鳥氏も其一人である。

然し、同じやうに禁制の果實を食つた人でも、或る者は其永久の砂漠を歩むの苦痛と煩はしさに飽いて、吾と吾が手に吾が身を亡ぼして、そして、悲惨なる其運命に對する勝利の聲を揚げる。之れ厭世家である。又、或物は吾が生永遠なる無味と索漠に堪へず、己れを歎いた虚偽の生活を送つて、

索漠たる其生を誤魔化さうとする。まぎらさうとする。之れ所謂芝居氣のある人である。芝居をする人である。自らを欺いて一度び破れたる昔の夢を再び見ようとする。強い酒に酔ひ、女に惑溺して、其長い苦痛をせめて一時でも紛さうとする。これ所謂デカダンの徒だ。

余は、現時の文壇に於て、此の同じく近代思潮の動搖に觸れた作家の中で、明らかに此の二傾向を代表した作家を見る。即ち一は眞山青果氏で、一は、正宗白鳥氏である。青果氏は、極度に此のデカダン思想の苦悶の影を適切に帯びた人である。己を欺き、人を欺いて堪へざる苦悶を、瞬間の夢魔に惑

溺して、忘れやうとして居る。それが遂には病的に第二の性となつて居る。

白鳥氏は冷眼、白眼に世を見て、己を欺むくことも出来なければ、悪夢の惑溺もなく、荒涼たる生存を續けて居る人である。青果氏の然うした病的思想も悲惨であるが、考へて見ると白鳥氏の悪夢の惑溺すらもない生存は、更に――悲惨の極である。余は此の比較し易き區分の極めて明らかな二氏の性格及び其思想を研究し、論じて見たなら、極めて興味ある問題だと思ふ。

白鳥氏は消極的に強よい人である。自殺もせず、惑溺もなくして、其荒涼たる生存に堪へ得られる丈け、それ丈け強い人である。

### 蒲原有明氏

余は有明氏を未だ見ざる以前、何となく蟲の好かぬ人であつた。嫌ひな人であつた。所が會つて見ると、そんな氣は消えて、何となく好きな人となつて了まつた。人間の想像は事實の前に對して何の權威もない。

余の有明氏に初めて面會したのは、初夏の或る夕方であつた。余は玄關に案内を乞うて、取次に出て來た人に來意を

告げると、少時して、氣輕に出て來られたのは、有明氏其人である。余は導かれて玄關側から、直ちに廊下を通り氏の書齋に入つた。

有明氏は、詩人らしい厭味のない人である。極めて快活な人で、客に接する態度もうまい。客をして、極りの悪いやうな思ひを決してさせない。又、黙して少時でも座を白けさせる様なことがない。絶えず注意して話題を向けて客に語らせ、又自分も語つて、其間に毫も隔てらしい所がない。其聲は少しのわだかまりもなく高く、時々何かの拍子にカラ〜と如何にも面白さうに笑ひ上げる。

由來、詩人とか歌人とかには氣取屋が多い。如何にも詩人らしく、如何にも歌人らしく見せようとする。例へば、妙に髪なぞ分けて、薄つべらな蒼い顔を澄すとか、殊更に目を伏せたり、物に感動する感情の烈しいやうな様を見せたり、七面鳥のやうに表情の變化に苦心する人が多い。之れは總べての詩人、歌人の共通して有する弱點のやうである。即ち、詩人の歌人は、如何にして吾れをして詩人らしく見せ、歌人らしく見せんかと苦心して居るのである。之れ小人輩の小なる虚榮である。有明氏の人物には其厭味がない。様子にも態度にも決して然うした臭味がない。有明氏は色の黒い、瘦せて骨



張つた人である。目が丸く大きい。

余は、有明氏は何うしても、天成の詩人と見ることが出来ない。詩に門外漢たる余は氏の作品に就いては何等の智識もないが、其の人物を見た所、何うも感情の人ではなくて、寧ろ智の人であるらしい。抑へ切れざる感情が胸に漲つて、其響が直ちに詩となつて出るのではなくて、一種の思想を詩とする人ではあるまいかと思ふ。余は詩、本來の生命とする所が、人間天真偽らざる感情の流露にあるのか、或は其内容となつて居る所の思想にあるのか、それは知らない。又、茲でそんな八かましい問題を何う斯う言はうとするのでもない。

い。只、有明氏に接して受けて印象は、何うも感情の人とは見えなない。従つてその養はれたる思想を、すぐれたるアートを以て、完全なる詩として歌ふ人ではあるまいかと思はれた。併し乍ら余は詩壇の門外漢である。

茲に有明氏の詩の内容に就て斷言することが出来ない。只、其人物に依つて斯る人であるが故に、其作られたる詩は、如斯ものであらうと、疑問を付した薄弱な言葉を使つて置くのである。

## 戸川秋骨氏

戸川秋骨に面會した。

夏であつた。紺緞の單衣を着て、白い帯を締められた。髪を少し長目に刈つて、口髯の極めて濃い人である。顎のチヨンポリとしたやうな、眼の可愛い人で、キチンと坐つて静かな、そして丁寧な聲で話される。

秋骨氏の書かれたものを、時々雑誌で拜見すると、些つと皮肉なぞ云ふ人であるが、人物に接して見ると、皮肉らしい所がない。會つて見た感じの面白い人である。斯う話しに接續がない。丁度兎が飛ぶやうにヒョコリくと話される人である。聲に熱もなければ、調子に乗つて吾が話に熱心にな

ると云ふこともない。

兎のやうな感じの人でもあるが、又、山雀のやうな人でもある。何となく面白味のある人である。

話をしながら、相手の顔を兎の目を細くしたやうな目で、如何にも不思議さうに見詰めて、其目を中々動かさうとはされぬ。笑ふ時にも決して、顔の全部で笑はれない。目尻と口元とで笑ふ人だ。

秋骨氏は彌張り文學界の同人である。然し、比較的文學界臭味が抜けて居る。人物が文學界離れがして居る。氣取つた所と、くさ味と厭味なところが少ない。何所か人間離れのし

たとばけたやうな人である。

秋骨氏は何學校かの先生であると云ふことだ。然し所謂先生らしい所がない。形のない顔である。

## 柳川春葉氏

何日であつたか、空は晴れたが風の烈しい。春の日であつたことを覚えて居る。自分は其時初めて柳川春葉氏に、その書齋でお目にかゝつた。それまで、雑誌の寫真版やなんかで春葉氏の肖像は見たことがある。口髯の様子やその風采からして、氣障な厭味のある人であると、自分はひどく春葉氏

を嫌つて居た。然し、會つて見て自分は少なくとも自分の不明を愧ぢた。春葉氏は決して厭や味のある人ではない。氣心の置けない、さつぱりとした、自分のやうな後進に對しても、それは此方で却つて痛み入るぐらゐの叮嚀にされる。少しも大振つた厭なところのない、極めて謙遜な人である。自分は肖像を見てこそ春葉氏を毛嫌ひしたが、實際接して見て、今迄の然うした厭な感情はけろりと忘れ、懐しい人に思つた。春葉氏は髪を長く刈つて、顔の長味な、色の黒い、瞼毛の黒くて長い、頬のこけた、年よりは割合に老けて見える人だ。聲は普通の男らしい聲で、眼の光りにも鋭い影がない。話をさ

れても、人にあたりさばりのないやうに、深く突つ込んだ話  
はされない。

春葉氏の作品を讀んで見ると、どの作品にも、鋭い氣力と  
云ふものがない。その軽い描寫に云ふことの出来ない面白  
味がある。春葉氏の性格がそれだ。鋭いところや、尖つたとこ  
ろがない。強々しいところがない。吾れは男だ——と云つて腕  
を叩いて立ち上るやうな、然うした強い鋭い氣力と意地を、  
春葉氏の性格に於て求めることが出来ない、さればと云つて  
決して女々しいと云ふのでもない、弱々しいと云ふのでも  
ない。只然うした秀で、強い鋭いところがないと云ふまで

だ。露骨に云ふと、春葉氏は棄てばち的、デカダンの人では  
ない。何物をも疑ひ、何物をも呪ひ、何物にも反抗せずには居  
られないと云つたやうな、現代の暗黒な苦悶の苦が味を味  
はさない人だ。味ふことの出来ない人だ。諦めのない人であ  
る。苦しんで何になる。悶へて何になる。肉を削ぎ血を涸らし  
て苦しみ悶へたその結果に何が得られる。苦しんでも悶へ  
てもなるやうにしかならぬと直ぐ諦らめて了ふ。悟つて了  
ふ。で、その作品にも自づから然うした諦らめや悟りの影が  
出て、現代の深い苦悶とも云ふべき影が描かれない。近來春  
葉氏の小説を云々する者がある。それは、要するに近代文藝